

平成 28 年度
千葉大学附属図書館 外部評価報告書

平成 2 9 年 3 月

はじめに

千葉大学附属図書館では、平成 29 年 1 月 5 日に点検・評価委員会、同 2 月 13 日に外部評価委員会を開催し、平成 22 年度以来 6 年ぶりの自己点検・評価、平成 25 年度以来 3 年ぶりの外部評価を実施した。今回の評価対象期間は平成 25～27 年度の 3 年間である。

外部評価委員は久留島典子東京大学附属図書館長、田村俊作慶應義塾大学名誉教授、佐藤義則東北学院大学図書館長、鈴木宏子一橋大学学術・図書部長にお引き受けいただいた。事前にご提出いただいた評価に加え、委員会当日の質疑においても、忌憚のない、かつたいへん有益なご助言を多数いただくことができた。ご多忙のなかお力添えを賜った皆様にあらためて御礼を申し上げたい。

前回の自己点検・評価後、当館は、総合メディア基盤センター（現・統合情報センター）、普遍教育センター（現・全学教育センター）とともに「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ『考える学生』を育成するためのコンセプト「アカデミック・リンク」を平成 23 年度に立ち上げ、さらにアカデミック・リンク・センターが発足するといった大きな変化があった。その間、千葉大学を含む国立大学法人全体を取り巻く環境も変わってきたことは言うまでもなく、今回の評価でも改善すべき点として指摘のあった人員・予算面への影響は特に大きなものがある。

しかしながら、当館が本学の知識基盤を提供し、教育・学習、そして研究活動に対して支援を行っていくという立場に変わりはない。長年の懸案であった松戸分館の設備環境についても改修の目途がたち、当館は今後も新たな知の創出を紡ぐ場としての歩みを進めていくこととなる。

最後に、当館の活動に理解とご支援をいただいた徳久剛史学長をはじめとする本学の関係各位、及び学外の皆様に心より感謝申し上げるとともに、今回の自己点検・評価および外部評価をもって道程を振り返り、進むべき方向を照らす灯としたい。

千葉大学附属図書館長
竹内 比呂也

目 次

はじめに	1
I 外部評価委員会報告	
1. 開催日時・議事次第	4
2. 委員会名簿	5
3. 委員会規程	6
4. 総評	8
5. 評価結果	10
6. 質疑応答要旨	25
II 外部評価委員会資料集（兼：点検・評価委員会資料集）	
1. 附属図書館の概要	35
1.1. アカデミック・リンク機能の推進	
1.2. 中期目標・中期計画に係る活動	
2. 管理運営	37
2.1. 運営組織	
2.2. 専門部会	
2.3. 耐震改修・増築・機能改修	
2.4. 防災対策	
2.5. 人材育成・研修	
3. 予算・経費	46
3.1. 図書館資料費	
3.2. 図書館運営費	
3.3. 概算要求	
4. 施設・設備	50
4.1. 延床面積と閲覧座席数	
4.2. 学生あたりの閲覧座席数	
4.3. 収容冊数	
4.4. 利用者用 PC 台数	
4.5. 業務システム	
5. 学術情報資源	54
5.1. 所蔵資料	
5.2. 電子資料	
5.3. コレクション	

6. サービス	59
6.1. 利用対象者	
6.2. 開館時間	
6.3. 利用実績	
6.4. 留学生サービス	
6.5. ウェブサービス	
7. 情報発信・広報	66
7.1. ウェブによる広報	
7.2. 学術成果リポジトリ	
7.3. 図書館職員による研究教育発表等	
8. アカデミック・リンク・プロジェクト	72
8.1. コンテンツ形成（旧コンテンツ・ラボ）	
8.2. 人的支援（旧ティーチング・ハブ）	
8.3. 空間整備・評価（旧アクティブ・ラーニング・スペース）	
8.4. 広報・成果普及	
8.5. ALPS（アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成）プログラム	
9. 地域・社会連携	79
9.1. 市民への公開	
9.2. 高大連携	
9.3. 千葉県内図書館との連携	
10. 他機関図書館との連携	81
10.1. 国立大学図書館協会	
10.2. 千葉大学，お茶の水女子大学，横浜国立大学における図書館連携 （三大学連携）	
10.3. 大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議	
10.4. その他	
11. 各館特記	86
11.1. 本館	
11.2. 亥鼻分館	
11.3. 松戸分館	
(参考資料)	94
年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）	

平成28年度千葉大学附属図書館外部評価委員会議事次第

1. 日 時 平成29年2月13日（月） 13:30 ～ 17:40

2. 場 所 千葉大学附属図書館本館2階大会議室

3. 議 題

(1) 千葉大学附属図書館外部評価について

- ・附属図書館報告
- ・施設見学
- ・質疑応答、意見交換
- ・委員による評価についての意見交換
- ・講評

(2) その他

4. 配付資料

資料1 千葉大学附属図書館点検・評価委員会／外部評価委員会資料集

資料2 千葉大学附属図書館外部評価委員会出席者名簿

資料3 附属図書館外部評価委員 評価まとめ

資料4 千葉大学附属図書館点検・評価委員会評価結果

- ・千葉大学学習状況・情報利用環境調査2015集計報告書
- ・千葉大学概要2016
- ・千葉大学アカデミック・リンクパンフレット
- ・千葉大学附属図書館本館利用案内
- ・千葉大学附属図書館本館フロアマップ

千葉大学附属図書館外部評価委員会

委 員

久留島 典子	東京大学附属図書館長
田村 俊作	慶應義塾大学名誉教授（前・慶應義塾大学メディアセンター所長）
佐藤 義則	東北学院大学図書館長
鈴木 宏子	一橋大学学術・図書部長

千葉大学附属図書館

竹内 比呂也	附属図書館長
桑原 聡	附属図書館亥鼻分館長
木下 勇	附属図書館松戸分館長
大山 努	附属図書館利用支援企画課長
高橋 菜奈子	附属図書館学術コンテンツ課長
成澤 めぐみ	附属図書館利用支援企画課副課長
庄司 三千子	附属図書館学術コンテンツ課副課長
鈴木 伸一	附属図書館利用支援企画課総務係長
池尻 亮子	附属図書館利用支援企画課アカデミック・リンクグループ専門職員
武内 八重子	附属図書館学術コンテンツ課亥鼻分館係長
佐藤 啓威	附属図書館学術コンテンツ課松戸分館係長
田川 裕美	附属図書館学術コンテンツ課学術コンテンツグループ
福田 友里	附属図書館利用支援企画課総務係

千葉大学附属図書館外部評価委員会規程

(設置)

第1条 国立大学法人千葉大学点検・評価規程第4条第1項に基づき、千葉大学附属図書館（以下「附属図書館」という。）の活動及び運営の状況について、第三者の立場から客観的な提言及び評価を行い、もって附属図書館の活動の発展及び充実に資するため、千葉大学附属図書館外部評価委員会（以下「外部評価委員会」という。）を置く。

(組織)

第2条 外部評価委員会は、4名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、附属図書館の活動に関し識見を有する学外者のうちから、附属図書館長が委嘱する。

(委員長及び副委員長)

第3条 外部評価委員会に、委員長及び副委員長を置く。

2 委員長及び副委員長は、委員の互選によって定める。

3 委員長は、外部評価委員会を招集し、その議長となる。

(任期)

第4条 委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

2 委員の欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(会議の成立等)

第5条 外部評価委員会は、委員の過半数の出席がなければ会議を開くことができない。

2 議決を要する事項については、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

3 会議に出席することのできない委員は、書面をもって表決をなし、又は他の委員に表決を委任することができるものとし、この場合には出席したものとみなす。

(委員以外の出席)

第6条 委員長は、必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聞くことができる。

(庶務)

第7条 外部評価委員会の庶務は、附属図書館利用支援企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規程に定めるもののほか，外部評価委員会の運営に関し必要な事項は，外部評価委員会が別に定める。

附 則

この規程は，平成25年4月1日から施行する。

外部評価委員会 総評

千葉大学附属図書館（以下、附属図書館）は本館及び亥鼻・松戸の 2 つの分館で構成されており、学内他部署との協力により立ち上げたコンセプト「アカデミック・リンク」実現のための組織「アカデミック・リンク・センター」事務部門も担っている。本委員会は附属図書館の平成 25～27 年度、3 年間の活動について評価を行った。評価項目は「管理運営」「予算・経費」「施設・設備」「学術情報資源」「サービス」「情報発信・広報」「アカデミック・リンク・プロジェクト」「地域・社会連携」「他機関図書館との連携」「各館特記」の 10 項目である。

本委員会は、附属図書館の 3 年間の活動を総体として高く評価する。とりわけ千葉大学の特色である教育学習支援活動「アカデミック・リンク・プロジェクト」は国内大学図書館において稀有の取り組みであり、教職協働のモデルとしても優れた事例である。図書館職員による活発な論文・口頭発表、講師や委員等の派遣による他機関への貢献度の高さも、附属図書館が成果をあげていることのあらわれと言えよう。

一方、それらの活動を支える図書館職員数と予算の面では不安が残る。職員については管理職が増員されたことは評価できるものの、現場を担う職員の数は同規模大学と比べても少なく、業務量に対して絶対数が不足していると思われる。多彩なプロジェクトを今後も持続するため、特に係長級以下の職員増員を提言したい。しかしながら現状の人員によるパフォーマンスの高さを鑑みると、複数のプロジェクト業務について課を超えて担当し、教員との協働体制で進めるといった機能的図書館運営のための職員配置のあり方は、先進的事例として価値あるものであり、今後の他機関への情報共有も大いに期待する。

予算については、図書館資料費・運営費ともに大学総経費に占める割合が平均を下回っている。図書館資料費については、経費の割り振りを見直すことにより来年度は大幅な増額の目途がたっていることは喜ばしいものの、増額後の金額も充分とは言えない。特に教育に資する学生用図書費はさらなる増額と安定化を図るべきである。プロジェクト経費等の獲得によりこれらの不足を補っていることは、附属図書館への学内外からの評価の高さを示しているが、成果が出た取り組みについては恒常的経費に組み込んで基盤部分の増額を図るなど、大学として改善につなげるような仕組みを構築することを要望したい。

他に大きな課題としては、本館と両分館の格差があげられる。施設・設備面のうち、老朽化が著しい松戸分館については、改築の見通しがついたとのことで今後に期待したい。亥鼻分館については、キャンパス内立地の問題など附属図書館のみでは改善が難しいファクターもあるが、他分野以上に電子資料の存在が大きい医薬看護系図書館であることを踏まえ、必ずしも施設に依存しないサービスポイントのようなあり方も検討してはどうか。両館共通の課題では、アカデミック・リンク機能のさらなる分館への敷衍が大きな問題だが、それを進

めるなかで、千葉大学の教育・研究活動における図書館の位置づけがより明確になると考える。また施設・設備が本館と同等でない他キャンパスでのプロジェクト展開が進めば、必ずしも施設が必須なのではなく機能として敷衍できることが証明され、他大学にも大いに参考となる。こうした点で、今後のプロジェクト展開に注目していきたい。

これ以外に、各項目について以下のような意見が出された。

- ・[学術情報資源] 電子ジャーナル購入については、研究資源確保という観点から優れた仕組みが確立されている。
- ・[サービス] 情報リテラシー教育は非常に活発で、高く評価できる。
- ・[サービス] 学生個々がどのように図書館を使っているのか、グループ学習スペースや個人学習スペース別の利用頻度など種々の統計データを利用して分析を進め、今後のサービスに結び付けてほしい。
- ・[サービス] 貸出冊数が少ないこと自体はそれほど問題ではないと考えるが、今後、貸出サービスをどのように位置付けていくのかについては、種々の調査分析を活かして検討してほしい。
- ・[情報発信・広報] 職員による教育学習支援に関する研究発表は、質量ともに素晴らしく、これはアカデミック・リンクの取り組み自体が優れていることを示している。さらに、こうした成果公表等によって、図書館職員が大学側から評価される仕組みがあってもよいのではないか。
- ・[情報発信・広報] リポジトリが本項目にあるのは違和感があり、研究支援機能として項目付けるべきではないかと考える。
- ・[地域・社会連携] 千葉大学は第3群の国立大学であると同時に千葉県内唯一の国立大学であり、双方のバランスをとるのが難しいと思われる。今後の地域連携については、附属図書館のみならず大学が地域とどのような関係を築いていくのかを見極めることが重要であろう。
- ・[地域・社会連携] 学外者への館外貸出を行っているのは、国立大学図書館としてはかなり踏み込んだサービスといえる。
- ・[他機関図書館との連携] 他機関図書館との積極的連携は大変優れており、大学図書館全体への貢献度が極めて高い。とりわけ三大学連携で行われている PDA は、従来の連携の枠を超える事業として評価できる。

千葉大学附属図書館は、アカデミック・リンク・プロジェクトをはじめとした先進的取り組みにおいて、国内大学図書館のトップランナーともいえる存在である。職員数・予算など国立大学法人を取り巻く状況は厳しく、その点は千葉大学および附属図書館の課題ともなっているが、学内外のさらなる理解と連携を得て今後も国内大学図書館全体を牽引し続けることを期待する。

附属図書館外部評価委員 評価結果

評価指標	A：非常に良好である	……	十分な活動がなされている
	B：おおむね良好である	……	改善の余地がある
	C：やや不十分である	……	改善の必要がある
	D：不十分である	……	大幅な改善が必要である

○管理運営

委員会評価：A（点検・評価委員会評価結果：B）

アカデミック・リンクなど、機能に沿った図書館職員の配置が行われている点は高く評価すべきだが、現在果たしている役割を今後も安定して行うため、職員の増員が必要である。また機能的な図書館運営のための職員配置のあり方等については、先進的事例として他機関に示してもらうことで情報共有を期待したい。

○予算・経費

委員会評価：B（点検・評価委員会評価結果：B）

図書館資料費、運営費ともに同規模の大学と比較して少ないのは懸念すべき点である。その分、プロジェクト経費獲得により補っているのは評価できるが、それらの経費へ依存するのは危険でもある。プロジェクトで成果をあげたものは一定の時点で恒常的経費に組み込まれていくような仕組みが必要と考える。

○施設・設備

委員会評価：A⁺（点検・評価委員会評価結果：B）

西千葉本館は施設・設備ともに高く評価でき、それらを利用した活動も活発に行われていると評価する。松戸分館は改築の見通しがたったということで、今後に期待したい。亥鼻分館は今後のサービス展開について、必ずしも施設依存ではない形で行っていくことを考えてもよいと思われる。

○学術情報資源

委員会評価：B（点検・評価委員会評価結果：B）

電子ジャーナルについては大学の学術基盤戦略として整備の仕組みがきちんと構築されているが、学生用図書費は更に増額の努力が必要である。

○サービス

委員会評価：A（点検・評価委員会評価結果：B⁺）

情報リテラシー教育が活発に行われており、高く評価できる。今後は利用総数だけでなく、個人ごとの利用頻度分布がどのようなになっているかを確認し、それらの量的データを基に、更にサービスの方向性を探る必要があるのではないかと。また今後貸出冊数をどう考えていくかについても、アカデミック・リンクの種々の調査などを活かし、構造的に分析を進めてほしい。

○情報発信・広報

委員会評価：A（点検・評価委員会評価結果：A⁻）

職員による発表や講師派遣等が非常に活発に行われており、附属図書館およびアカデミック・リンク・センターが成果をあげていることの現れといえる。今後は更にこれらの活動が職員評価につながる仕組みを考えてはどうか。

機関リポジトリが当該項目にあるのは違和感がある。研究戦略の枠組みで位置づけるべきではないか。

○アカデミック・リンク・プロジェクト

委員会評価：A（点検・評価委員会評価結果：A）

本プロジェクトは千葉大学附属図書館の特色で最大の効果をあげており、国内大学図書館でも稀有の事例といってよい。これから他キャンパスへ展開していくなかで千葉大学の教育活動にとってのアカデミック・リンクの位置づけがより明確になっていくと考えられる。その成果に期待したい。

○地域・社会連携

委員会評価：A⁻（点検・評価委員会評価結果：B）

一般市民への開放について、館外貸出など大学図書館でできることはほぼ行われており、その点は評価できる。今後は附属図書館のみならず大学が地域とどのような関係を築いていくのかを見極め、その方向性に沿って図書館としての地域連携を進めていく必要があるだろう。

○他機関図書館との連携

委員会評価：A（点検・評価委員会評価結果：A）

委員の派遣などを積極的に行い、他大学に比べてたいへんよく進んでいる。また、PDAなど従来にない連携に積極的に取り組んでいる点は高く評価できる。

○各館特記

委員会としての評価指標策定にはなじまないためその点については対象外とする

(点検・評価委員会評価結果：B)

アカデミック・リンク機能の分館敷衍を進めるなかで，千葉大学の教育活動，研究活動において図書館全体がどのような役割を担っていくかが確認できると考える。今後更に分館へのプロジェクト展開について注目していきたい。

2. 管理運営	
A: 非常に良好である	●●●
B: おおむね良好である	●
C: やや不十分である	
D: 不十分である	

3. 予算・経費	
A: 非常に良好である	●
B: おおむね良好である	●●●
C: やや不十分である	
D: 不十分である	

4. 施設・設備	
A: 非常に良好である	●
B: おおむね良好である	●●●
C: やや不十分である	
D: 不十分である	

5. 学術情報資源	
A: 非常に良好である	
B: おおむね良好である	●●●●
C: やや不十分である	
D: 不十分である	

6. サービス	
A: 非常に良好である	●●●
B: おおむね良好である	●
C: やや不十分である	
D: 不十分である	

7. 情報発信・広報	
A: 非常に良好である	●●●●
B: おおむね良好である	
C: やや不十分である	
D: 不十分である	

8. アカデミック・リンク・プロジェクト	
A: 非常に良好である	●●●●
B: おおむね良好である	
C: やや不十分である	
D: 不十分である	

9. 地域・社会連携	
A: 非常に良好である	●
B: おおむね良好である	●●●
C: やや不十分である	
D: 不十分である	

10. 他機関図書館との連携	
A: 非常に良好である	●●●●
B: おおむね良好である	
C: やや不十分である	
D: 不十分である	

11. 各館特記	
A: 非常に良好である	●
B: おおむね良好である	●●●
C: やや不十分である	
D: 不十分である	

2. 管理運営

◆評価コメント

国立大学法人において全体に人員削減が進んでいるなか、アカデミック・リンク機能強化のため、管理的職員 2 名が増員されたことは、アカデミック・リンク・センターおよび附属図書館の活動が、大学内において高い評価を得ていることを示すものといえる。ただし、本館の職員数や、専任・臨時職員がほぼ同比率である現状が、活発なアカデミック・リンク機能を支えるのに適切なものであるかについては疑問もある。また、運営に最適な組織形態をめざし、度々の組織改編を行っていること自体は意欲的と評価できるが、安定的組織が構築できたのか否かについては、評価期間中の情報からは不明といえる。

耐震改修・機能改修については、本館では完了し、多様な機能が整備され、防災対策等もなされていることが、高く評価できる。こうした多様な機能を実現するための人材養成についても、外部研修等を活用し、熱心に取り組んでいるといえる。

全体に人員が削減されている中で、新たに副センター長と副課長が配置されたことは、図書館業務充実の意義と今後の一層の発展が理解されたことを示すものであり、高く評価すべきである。

運営組織について部長、副課長の管理職が 2 名増となったことは大きな改善だったと思う。一方、図書館職員は、同規模大学に比して少ないと言わざるを得ない。特に分館の運営が気になるところである。とはいえ、この人数でアカデミック・リンクを含む業務や事業をこなしているとするとパフォーマンスの高さは評価すべきと考える。

運営委員会組織については、学術資料専門の専門部会を設けていることは審議等における機能性の高さをうかがわせる。

施設・防災については本館の改修工事が完了したことで整備され、防災対策にも真摯に取り組んでいると思う。

・アカデミック・リンク・センターの副センター長の配置、利用支援企画課副課長の増員等、組織編成面での整備が着実に進んだことは、特に組織としての安定性の面から高く評価できる。

・多岐にわたる業務を少ない人員でこなしていることは資料からも理解でき、スタッフの士気の高さと優れた能力、スキルが確保されていることに対して敬意を表したい。ただし、こうした生産性の高さという強みは、一方では組織編成面での脆弱性として捉えるべき問題点ともなり得る。労務管理面での実情把握や改善の方向性についても確認する必要があるのではないかな。

◆改善に向けての提言

多様な機能をより高度に実現するためには、係長以下の職員増が必要と思われる。

研修が充実していることは評価される。大学の国際展開に一層貢献すべく、語学研修や海外との交流機

会の一層の充実があっても良いのではないか。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

図書館内の業務の切り分けや役割分担は、伝統的な管理部門、サービス部門という区分ではなく、合理的な業務配分を行っているのではと推察している。先進事例として他大学の参考にもなるので、業務の分担方法、常勤外職員との業務配分等について詳しく情報共有していただけるとありがたい。パフォーマンスの高さが単に労働時間と比例しているのではなく合理的な運営であることが、今後の働き方の先進事例となることを期待する。

3. 予算・経費

◆評価コメント

アカデミック・リンク活動経費が、文部科学省運営費交付金特別経費プロジェクトや教育関係共同利用拠点として措置されていることは、その先進性・先導性を評価されてのことであり、十全な活動の基盤となっているといえる。学生用図書についても館外資金を獲得するなど、多様な経費獲得の努力は充分になされているとみなせる。

図書館資料費については、若干拡大しているが、電子ジャーナル費用の増加がその主たる理由と考えられ、資料費自体としては増加とはいえないとみなせる。一方、図書館運営費については減少しており、他の国立大学と比較しても、図書館に対して恒常的に支出している経費は、けっして多いとはいえないと評価できる。

大学総予算が厳しい中、図書館資料費を安定的に確保できている点は、その重要性が広く理解されていることを示しており、高く評価される。また、プロジェクトのために別に予算が配分されている点も特に評価される。

図書館資料費、運営費共に同規模大学(区分 A)に比して下回る数値となっている。アカデミック・リンクはこれから安定期に入られるので、資料費、運営費の充実による図書館基盤の安定が期待される。一方、概算要求を継続的に獲得していることや、大学経費における資料費の割合は増加傾向にあることは、学内外でのアカデミック・リンクの高評価やそれに伴う大学に対する図書館の貢献度が認知されているものと推察する。

・図書館資料費は平成 25 年度以降若干の増加があったものの、他の国立大学等の状況から見ても、充分とは言えないのではないかと。

・特に、図書館資料費の 7 割超を電子ジャーナル経費が占めており、図書費は総計で 3,500 万円程度である。このことから、特に学生用図書費については、学生選書企画等で努力が成されていることは理解できるものの、絶対的な不足が懸念される。

◆改善に向けての提言

文部科学省からの特別経費等にも依存するのではなく、高い水準の活動を維持・継続するための恒常的経費を、大学自体も措置していく必要がある。

図書館資料費が確保され、プロジェクトのための予算が配分される一方、そうしたものの執行を基底でささえるべき図書館運営費が減額されていることが気になる。予算の円滑な執行のためにも、図書館運営費は減額すべきでなく、むしろ増額が望ましい。

学生用図書費の確保や運用について、抜本的な対策が必要なのではないか。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

主に日本語で学習する学生のために、和図書の資料費の増額が望まれる。

アカデミック・リンクの活動と図書館の運営との資源(予算、人的資源等)配分の現状と展望についてお伺いしたい。

4. 施設・設備

◆評価コメント

本館においては、閲覧席が50席増加しただけでなく、大幅な機能改善が進んだので、施設面の充実ぶりは高く評価できる。また、設備としても、利用者用 PC が充実しており、特に貸出 PC は活発に利用されているようである。業務システムについても、先進的なシステムが導入されており、アカデミック・リンク機能の基盤となっている。

このように高く評価できる本館の施設・設備に比べ、亥鼻・松戸両分館については、機能改修の努力は行われているものの、施設・設備ともに大きく改善が望まれる。

アカデミック・リンク・センター構想に沿って本館が改修され、空間の再定義により利便性が飛躍的に向上したことは高く評価できる。一方、亥鼻および松戸の2分館は建築後日も経っており、同様の構想の下で、各地区の実情に沿った新築ないし改築が望まれる。

大規模改築に伴い、本館の席数は微増ではあるが、いわゆる有効席数は増加しているものと思われる(例えば以前の4人席は実質2名しか座らない等の実態があった)。収容冊数については、現在の本館の所蔵冊数が103万冊に対し、109万冊となっているのが気になるところである。今後の所蔵冊数の展望などをお伺いしたい。利用者用 PC はよく整備され利用されていることがわかる。業務システムについては、授業資料ナビゲータ、レコピック、動画収録システム等、従来の図書館業務の枠を超えたシステムを先進

的に導入していることは高く評価できる。

- ・図書館本館については、改築、改修の結果、利用環境が向上したことは大いに評価できる。
- ・一方で、亥鼻分館、松戸分館の整備については、早急な改善が求められる。

◆改善に向けての提言

松戸分館については、老朽化している施設の根本的な改修が必要と思われる。

先進的な複数の業務システムを活用し、さらに更新・発展させていくための体制構築についても、留意する必要がある。

利用者向けPCの利用増に関しては、図書館としての取り組みをどの程度まで拡大するのかを含めて、慎重に判断する必要があるのではないか。場合によっては、全学的な取り組みの方が、コスト的での優位性やサービス内容の充実をもたらす可能性も考えられる。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

PCが活用されていることは評価される。一層の充実を望みたい。

有効席数については、アカデミック・リンクの情報利用定点観測プロジェクトにて検証中とのことであるので、結果と考察の共有を期待する。

5. 学術情報資源

◆評価コメント

電子ジャーナルタイトル数については、購入経費が増大する中、維持されており、電子ブックについても増加しているということなので、電子的媒体資料に対する積極的な収集姿勢は大いに評価するべきであろう。

資料費が限られるなか、選書がどのように行われているのか、説明が充分とはいえないが、学生の希望も含め、種々工夫して選書を行おうとする姿勢がみられ、その点は高く評価すべきであろう。

コレクションの電子化公開については、徐々に進めているが、一層の進捗が望まれる。

電子ジャーナルの価格が高騰する中で、契約タイトル数を維持している点は高く評価される。

同規模大学との比較から蔵書数等はほぼ同等、電子ジャーナル、電子ブックは高い利用があると思われる。データベースはタイトルを絞り込んでいるのか、若干限定されている感がある。利用者からの要望はないか気になる。

コレクションについては、亥鼻、松戸の電子公開が評価される。今後も科研費等を申請しデジタルアーカイブ

イブを進めるとよいと思う。

- ・電子ジャーナルについては、価格高騰と厳しい予算状況が続くなかにもあっても、タイトル数を維持、確保しており、高く評価できる。
- ・しかし、図書費については金額が総計で約 3,500 万円ときわめて限られており、研究用、学生用とも不足が強く懸念される。

◆改善に向けての提言

資料費の増加が難しいなかで、電子媒体資料も含めた選書の適切性を担保するための工夫を、常に続けていく必要がある。

価格との関係もあるので一概には言えないが、電子ブックの利用がおしなべて低い点、および、データベース・電子ジャーナルの利用にむらのある点は、利用促進策を講ずるなど、改善が必要であろう。

6. サービス

◆評価コメント

期間を区分して効率的に開館時間を決めるなどの工夫がみられ、全体として開館時間も増加し、利用者数も伸びているなど、サービス面は高く評価できる。

レファレンスサービス件数の着実な増加や情報リテラシー教育の進展をみても、この側面において、特筆すべき成果をあげているといえよう。

留学生サービス・ウェブサービスも水準を維持しているといえるが、利用者の声を聴きながら、より多くのサービス対象者に実際利用されるような工夫を続けていくことが必要であろう。

学生数が減少気味の中で、入館者数および情報リテラシー教育参加人数が順調に伸びている点は、図書館の今後の役割に関わるものであり、高く評価される。

サービス内容については、基本的に他大学と同傾向と思われる。入館者数は増加とあるが、これだけの大規模な新築・改築があった割には、目覚ましい増加数ではないのではないかということが気にかかる。アカデミック・リンクのプロジェクトとして学習行動をつぶさに調査観察されているので、引き続きの調査研究を期待する。

レファレンスは、午後3時間にしては高件数である。また午後3時間でよいのか？という疑問もある。ただ担当者全員でレファレンス報告会を開催し、情報共有とスキルアップにつなげていることは評価できる。情報リテラシー、留学生サービスについては高パフォーマンスを上げており高評価。対面ガイダンス以外の支援方法の開発に期待するとともに共有をお願いしたい。

- ・入館者数が着実に増加していることは、図書館活動の特筆されるべき成果である。
- ・図書貸出数は全国的に低下しているはずだが、学生一人あたりの貸出数が約7.9冊(平成25年度～27年度)と国立大学の平均を下回っているのは、学生の図書館に対する期待の変化の反映なのか、あるいは図書館の資料構成上の問題なのかは気になるところである。
- ・ガイダンス、講習会等で構成される情報リテラシー教育が活発に行われており、評価できる。
- ・リンクリゾルバの提供を含むウェブサービスが、かなり高頻度で使われていることが見てとれる(サービスの有効性評価のためには、さらに詳細な情報が必要とは思われるが)。

◆改善に向けての提言

電子ジャーナル、電子ブック、データベースのアクセス数は、サービスの項目にあった方がわかりやすい。

貸出冊数は全国平均より少ないが、電子資料利用への移行と関連があるのかが不明。電子資料、電子ブックの利用統計および紙資料との比較があるとありがたい。

各サービスの利用状況について、単に利用総数を論じるのではなく、個人毎の利用頻度の分布がどのようになっているかについても確認する必要があるのではないかと(既に、実施済みかもしれませんが)。また、そこからインタビュー等によって、期待やニーズがどのように変化しているかを把握できれば、大きな改善に繋がる可能性も考えられる。

7. 情報発信・広報

◆評価コメント

附属図書館ウェブサイトおよび学術機関リポジトリ整備については、これまで他の国立大学附属図書館と比べても、先駆的に進めてきており、その成果の上に、現在さらに何を進展させるべきかという段階にきているとみなせる。広報という点では、SNS の利用が、先導的に行われており、利用者も多く、さらなる発展が予想される。学術情報発信面では、機関リポジトリ搭載データ数が、他大学に比してまだ優位を保っており、オープンアクセス方針を策定するなど、種々、将来のための検討がなされている点は、評価できる。

図書館職員による研究教育発表等については、発表数と発表職員の広がりにおいて、特筆すべき成果をあげている。アカデミック・リンク・センターでの活動実践がその背景にあり、大学図書館の今後の在り方を示すものと、高く評価できる。

職員による論文、口頭発表、講師派遣の多さは評価できる。特に国際集会での発表、共著・共同発表については、国内全体への貢献という点からも評価される。

利用者志向の良い Web サイトという印象を受ける。ただ、図書館概要や統計、ニュースレターのような広報的な発信がない。発行しない方針であればその理由をお伺いしたい。

リポジトリは日本初として恒久的に評価に値する。オープンアクセス方針の策定も先進的に行っている。

職員による発表、講師派遣等では大いに国内の図書館界に貢献している。あわせてこのことが職員の能力開発につながっていると思う。

・ウェブサイト、SNS による広報は、規模、内容とも充実しており、先進的な取り組みとして評価できる。
・機関リポジトリを「情報発信・広報」に含めるのが適切かについては疑問があるが、この面でも日本の大学図書館を代表する存在となっている。

◆改善に向けての提言

広報戦略は図書館のみならず、大学が一体となって策定していく必要があろう。

ウェブサイトの英語版の範囲を拡大されることが望まれる。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

機関リポジトリの質的・量的拡大を順調に進めるためには、今後の方向性をさらに明確に打ち出す必要があろう。

MyLibrary 利用促進への工夫を伺いたい。

8. アカデミック・リンク・プロジェクト

◆評価コメント

アカデミック・リンクの活動は、大学図書館のこれからの在り方を示す、先駆的モデルであり、教職協働によって特筆すべき成果をあげている。この活動は他の大学図書館からも注目されており、各プロジェクトの先進的試み自体が、その経過や結果分析も含めて、日本の大学図書館が共有すべき、貴重な経験といっても過言ではない。その意味で、コンテンツ形成、人的支援、空間整備・評価の 3 方面で多数のプロジェクトを遂行していることは、大変意欲的で、高く評価できる。

ただし、現時点では、教職協働が緊密に行われ、大きな成果が出ているとしても、持続可能なものとしていくためには、少なくとも図書館側職員の必要なリソースについて、図書館として厳密に検討し、各職員の熱意だけに依存する形にならないよう、十分に注意しなければならない。

わが国の大学図書館を先導する事業であり、今後とも一層の発展を望む。事業と評価とを一体として運用している点も評価できる。分館にまで展開することは重要であり、その成果が期待できる。

アカデミック・リンクの3つの柱である、コンテンツ整備と発信、人的支援、空間整備について、実験的な試みも含め、先進的な取り組みを行ってきたことは高く評価される。各プロジェクトについては終了したものもあるが、取り組みや調査を踏まえ課題を洗い出し、さらに高度化への努力を継続する姿勢には評価というより敬意を表する。またこれだけの多岐にわたるプロジェクトを少ない人数(特に業務を持つ図書館職員を含む)で実施してきたことは驚嘆に値すると思う。

アカデミック・リンクの Web サイトでは、これらの取り組みを発信し、ここに授業紹介動画から「あかりんアワー」、空間の使い方まで、千葉大学の教育支援が一元化されている。その中に従来から図書館が行ってきた情報リテラシーが組み込まれていることが重要で、図書館の取り組みが全学的に教育の一環であるということが、誰にでもわかるようになっており、このことは、国内の大学図書館では稀有の(初の?)事例ではないかと推測する。

・「学習コンテンツ」、「人的支援」、「空間」を柱にした素晴らしいコンセプトの下で、大きな成果をあげてきた。また、館長および職員が講演や論文公表等により、この面で国内の大学図書館を主導されてきたことは素晴らしい。

・特に、教員と職員が連携して行ってきた利用状況等の調査は数少ない事例として高く評価されることであり、今後のより一層の充実を期待したい。

◆改善に向けての提言

今後、各プロジェクトの結果分析を踏まえて、プロジェクトの入れ替え等を適宜行い、人的・資金的基盤をより有効に活用する必要がある。

分館への展開に際しては、キャンパスの特性を十分に踏まえることを期待する。

Web サイト上に授業紹介動画等はあるが、教材作成の成果などがわからない。作成数だけでも掲載してはどうか。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

ALSA による多様な活動は、大変注目できる。たとえば、アクティブ・ラーニング・スペースにおける学習支援活動について、教員、学生、図書館職員が協働して学生の学習をサポートする取り組みとして大いに評価できよう。なお、ALSA の活動を継続し発展させていくためには、アカデミック・リンク・センター教職員による、きめ細かいケアを十分に行う必要がある。

大学の Web サイトからも、「先進的な学習環境」「勉強したい」という項目からリンクされ、大学からの評価も高いと思われる。次の段階として、図書館職員を大学がどう評価するのか、現状と今後の展望をお伺いしたい。

9. 地域・社会連携

◆評価コメント

本館でおこなっている市民への館外貸し出しは、大学図書館としてはより踏み込んだ地域・社会連携といえる。その他、高大連携、県立図書館との相互協力協定、市内図書館、県内大学・市内研究機関図書館との連携など、極めて多様な取り組みを進めている点は、高く評価できる。

ただし、利用数自体は減少傾向にあり、その理由が広報の不足にあるのか、大学図書館資料の性格によるのか、といった分析を行い、その結果によって、より有効な連携の手だてをこうじていくべきであろう。

近隣住民との良好な関係構築という意味で市民への公開は意味があり、特に貸出にまで踏み込んでいる点は評価できるが、利用が徐々に落ち込んでいるなど、そのあり方については見直しても良いだろう。

地域社会では、地域の図書館界の中心として、一般市民、他の図書館へ大いに貢献をしている。

一般市民への貸出、公共図書館との連携等、多様な試みが行われていることは、開かれた大学という視点から評価できる。

◆改善に向けての提言

大学図書館が地域・社会と連携する場合、どのような要素を核にすることが有効なのか、展示なのか、講演会等なのかといったことを、さらに検討する必要がある。

公開イベントや千葉県内図書館との共催イベントなどの工夫により、利用者が固定化しないように工夫することが望ましい。

一般市民への開放に関しては、現状のサービスをどの程度まで強化(または維持)するか、大学としての使命と図書館の目標の再確認のうえで、サービスの優先順位の設定が必要となるのではないかと。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

千葉県立図書館との相互利用は広報されているのか？

アジ研との相互利用の紹介はWeb サイトにあるが、千葉県立図書館との相互利用については見つからなかった。その割に利用実績は高い。今後の方針等があればお伺いしたい。

10. 他機関図書館との連携

◆評価コメント

国立大学図書館協会をはじめ、その他の大学図書館、国立国会図書館、国立情報学研究所等関係他

機関との密接な連携協力事業を推進しており、アカデミック・リンクでの活動に代表される、大学図書館としての先進的事例を共有化することにも尽力している点は、高く評価できる。特に、大学図書館関係の連携・協力事業には積極的に関与しており、大きく貢献している。

三大学連携もユニークな試みで、こうした連携も今後のモデルとなろう。

総じて、他機関図書館との連携によって、職員がより意欲を持つ良い循環が形成されているように見受けられる点は、大きな効果と考えられる。

国内の大学図書館との連携に積極的に取り組んでいる点は高く評価できる。また、三大学連携は、PDAをはじめ従来の連携の枠を大きく超える事業としてとりわけ評価したい。

国立大学図書館協会、国公立大学図書館協力委員会へ、継続的に委員を派遣し、両団体の運営に大きく貢献してきた。また、国立情報学研究所、大学図書館コンソーシアム連合、機関リポジトリ推進委員会等大学全体で取り組むべき課題にも積極的に参加してきた。また、委員を派遣することで、個々の職員の能力を引き出し、優秀な職員を輩出しているのだと思う。

3大学連携については、自由な発想のもとに図書館における諸課題に協働して取り組む姿勢が高く評価される。他の図書館にも大きな影響を与えている。

連携事業の推進や、国立大学図書館協会等における委員会、プロジェクトへの職員の参加、派遣等、積極的な活動が行われており、全国的に千葉大学に対する評価を確実に高めている。

◆改善に向けての提言

国内で他に先駆けてPDAを導入したことはとりわけ高く評価される。その成果については、近い将来に評価し結果を公表することを希望する。

11. 各館特記

◆評価コメント

本館は建物の改修が完了し、多様な機能を持つ施設と、アカデミック・リンク・センターという人的組織が結合し、極めて大きな成果を上げている。

亥鼻・松戸両分館でも、会話可能エリアの設置、あかりんアワー中継・学生選書企画、貴重書の電子化など、現状で実施できるユニークな事業を実現しており、その点は大いに評価できる。

アカデミック・リンク機能を分館に展開しようとしている点や、学生選書企画を全学で実施している点などは、利用者サービスの平準化という点で評価できる。しかし、まだ展開は不十分であり、今後のさらなる活動が期待される。

本館については、アカデミック・リンクと共に今まで評価してきた通りであるが、加えて「てとり文庫」では非常勤職員のモチベーション向上、学生選書企画では SEEDS 基金の活用や学生の読書意欲の向上に効果があったと思う。「ひまわり8号」配信データディスプレイの設置は、千葉大学の研究の見える化の好例となっている。

亥鼻分館については、効果的な空間の使い方に工夫が見える。また亥鼻分館の特色である古医書コレクションについては、画像公開により全国の研究に資することを継続してほしい。松戸分館も本館に倣い学習環境の改善に努めていることがわかる。今後の改修に向けて単に本館の模倣ではなく、全国的にもユニークな園芸学部図書館として良い空間を作り全国に発信していただきたい。

-
- ・本館 L 棟の改修整備によって「場所としての図書館」の枠組みが揃い、施設利用のニーズに充分に対応していることが理解できる。
 - ・亥鼻分館、松戸分館においても、それぞれの状況に合わせた学習空間やコンテンツの整備が行われている。

◆改善に向けての提言

分館は本館に比べ、施設的にも人的にも制約があり、本館との格差を少しでも埋めるための整備が望まれる。

アカデミック・リンク機能の展開に際しては、キャンパスの特性を踏まえることが期待される。

特に、亥鼻分館、松戸分館の施設面については課題がありそうだが、実際に確認のうえ記したい。

◆その他中項目に対する評価・提言・コメント等

本館:K 棟のコンセプトは、他の棟に比べてやや違和感がある。「知識と出会う」「知識を見つける」など、知識を主語としない表現の方が良いのではないかな。

亥鼻分館:科目履修上学生参加が制約される点を考慮して学生連携企画を立ててはどうか。

外部評価委員会 質疑応答要旨

議長 それでは資料および本日の竹内館長による報告に基づいて質疑応答を。

委員 多様な活動は皆が評価すると思うが、それを担保するだけの職員をどうするか。館長ご自身が足りないとも発言されていたが、特に質だけではなく人数を確保することが非常に大きい。

館長 国立大学法人の現状として職員増員というのはたいへん難しく、戦略を考える必要があると考えている。

委員 プロジェクトなどで認められた予算に職員の人件費もついていると思うが、その期間だけの臨時か。

館長 そのとおりである。今日見学いただいたコンテンツ制作室の職員なども該当する。千葉大学では SULA（スーラ, Super University Learning Administrator）という名称で教育・学修支援専門職の配置を国際教養学部から始めているが、今後全学的に展開する予定である。現時点では、職員枠で能力を持っている人材が研修プログラムを受けて従事し、従来の 2,3 年程度の異動ではなく長期で仕事をやってもらう仕組みを作る方向となっている。そのように職員の転換を進めていった時に事務は誰がやるかという話は当然出てくるが、例えば URA のような第 3 の職種として別枠で確保するように、トータルで見た場合に支援職を増やすという戦略を考えるしかないのではないかと考えている。

委員 業務のなかでアカデミック・リンク・センター以外の図書館運営部分については教員以外の人員が必要だが、伝統的な図書館では管理課・サービス課という形になっているのを、千葉大ではかなり機能的に組み替えているように見える。他大学の図書館も人員が少なく今までの枠組みでは動けない状況になりつつあるので、先進事例としてどのように従来枠を崩しつつ、アカデミック・リンクの仕事をしつつ、職員が図書館を運営しているかを学外にも示してもらえれば非常に参考になる。

館長 国立大学の場合、2 課体制でやっている図書館は、かつては整理課と閲覧課という名称であった。これが 25 年ほど前に情報管理課、情報サービス課へと変わり、多くの図書館ではその体制が続いてきた。当館では以前は学術情報課と情報サービス課という名称で、電子を中心とした活動と紙を中心とした活動に分けるという考え方だった。現在、利用支援企画課はアカデミック・リンクに係る様々な業務と電子資料の購入提供等に関する業務、学術コ

ンテンツ課は従来の閲覧業務を中心に、紙の資料の整理を選書・購入まで含めてやる、というのが大きな枠組みとなっている。

千葉大職員 ただしアカデミック・リンクのプロジェクト部分は、課をまたがって1つの活動を行う。例えば ALSA-GS（アルサ・ジーエス、Academic Link Student Assistant General Support）という図書館業務支援をする学生協働は、どちらの課からも一緒にプロジェクトに入り、利用支援企画課についているレファレンス業務も学術コンテンツ課職員がコミットするなど、プロジェクトの枠組みは全館体制である。

委員 どんなプロジェクトにどれぐらい人数を割かれているのかというのは、もともと課や係という枠組みで考えるのではなく、現在ではプロジェクトベースになるということと理解した。ただプロジェクトベースでどれぐらいの人員配置をして、どういう目標設定をし、どう進めていくかという点がまだ不明である。

館長 アカデミック・リンクは7つのプロジェクトでスタートした。プロジェクトごとに担当を決めて、年度当初にこのプロジェクトでこういうことをやるという案を出して、アカデミック・リンク・センターで毎週開催しているプロジェクト会議で議論して決める。この方法で数年やってきたが、7つに分けるとどうしてもセクショナリズムが生じてしまう。隣のグループでやっていることがお互いにわからなくなったり、タイミングによって業務の多寡が出るのに相互に援助する体制が組みづらいということがあって、数年前からプロジェクトを大きく3つに再編した。それが空間、コンテンツ、人的支援で、今回の報告書もその3グループによっている。プロジェクトごとに教員と職員が両方入る形で担当が決まり、年次計画を決めて4月当初には前年度活動実績などを踏まえながら職員の数を毎年調整する。

委員 非常勤職員との業務配分について、ルーティン業務は非常勤職員が中心になっていると考えてよいか。また非常勤職員を特に増やしたわけではないのか。

千葉大職員 ルーティン部分はほぼ非常勤職員。常勤職員は企画分野や非常勤職員の作業環境を整備していくようなところに比重を置く。人数は特に増えていない。

委員 従来の業務は非常勤が主に分担するという場合、例えば予算等の最終的チェックや責任を担うことになるが、体制としてはどうなっているか。

千葉大職員 予算管理は常勤職員が担い、最終部分は係長レベルでチェックする。

委員 亥鼻と松戸の分館の運営は独立性が高いのか。

館長 亥鼻と松戸の基本的な部分は分館長にお任せしている。年度当初の図書館資料費配分の決定や3キャンパス共通で整備している電子ジャーナルについては当然十分協議するが、例えば亥鼻分館は医薬看護分野をサービス対象としており、独自資料購入として医学部等予算で別途ジャーナルを整備することもある。その判断は図書館委員会亥鼻分科会において分館長の主導でしていただいている。

千葉大職員 両館とも学術コンテンツ課の下に分館係長がおり、そういった動きは協議して進める。

館長 職員の人的管理ということに関しては、学術コンテンツ課長が責任を持つ形になる。したがって両分館の会議に課長が出席し、そういう場で議論する体制である。

委員 アカデミック・リンクの機能を分館で実現しようとした時に、どういう形で機能をその地区に合う形にしていけるか。

館長 現在具体的にそれが進んでいるのは松戸分館である。松戸で29年度から始まる予定となっている改修の大きな目的は、アカデミック・リンク機能の全学展開であって単なる図書館の改修ではない。既に検討委員会が立ち上がり、アカデミック・リンクの教員、図書館職員ほか、園芸学部教員、施設部関係者が加わる形で、機能を踏まえた施設面を検討している。ただアカデミック・リンク機能の展開ということであるが、現在、松戸キャンパスは係長1名と常勤職員1名体制に非常勤職員と派遣職員がいるのみで、現有の職員で管理運営するのは非常に難しい。機能強化のための職員配置を、30年度の教員増員も含めた形で検討したい。

議長 教職協働で非常に大きな成果が出ているが、アカデミック・リンク・センターの教員数については3名増えるとうかがった。現時点では？

館長 現時点の定員はゼロで、教員は兼務もしくはプロジェクトで雇用されている特任教員となる。スタート時は、私も含めて兼務教員は3名で、プラス特任助教4名という体制であった。教育関係共同利用拠点として認定された時に特任助教が1名増となり、現在は様々な部局から教員に兼務をお願いしている。兼務教員を増やしたのはアカデミック・リンクの活動を知っていただき部局に持ち帰っていただくことが主であり、実務を担っている兼務教員は現在、私を含めて2名である。

委員 特任の方の役割は勤務時間を含めてどういう形か。

館長 特任教員には裁量労働制が適用されており、勤務時間は一定の自由度はある。週に1回、金曜日午後のプロジェクト会議出席をベースに、あとは各プロジェクトで担当が決まっ

ており、随時メールや打合せ等で、教員と職員が必要な情報を共有して進めていく。

委員 図書館長がアカデミック・リンク・センター長を兼ねるということになっているのか。
2 人がそれぞれの長という形では非常に難しくなることもあると思うが、現実的にそういうことはないと理解した方がよいか。

千葉大職員 規定上は別組織であるが、それぞれの長は学長が指名する。これまで、図書館長はアカデミック・リンク・センター長を兼務してきたが、そこは学長の判断となる。

委員 これだけのプロジェクトが一体となって動いている以上、切り離して運営というのは非常に難しいのでは。

館長 形式的には可能であり、私個人は不可能ではないと考えるが、事務は大変だと思う。

委員 今回の評価項目も大項目 10 個の優先順位をどうするかという意味決定は難しいところと思った。特にアカデミック・リンク・センターと図書館と、論理的には利害が一致するわけではない。現在は意思決定の齟齬が出てくることはないが、特に優先順位の設定等は非常に難しい。現状でも難しいところはあるように見えるが、その辺はどうか。

館長 ご指摘のあった事柄について、現時点では私はそんなに難しいとは思っていない。図書館プロパーとしての業務が、基本的には減りつつある。図書館的機能を学内で展開していく部分については、むしろアカデミック・リンクというフレームワークのなかで行うことによってその価値を失わないという面もある。図書館長として意思決定しなければいけない部分は今後減っていくのではないかと。

議長 2つの組織は並行していかないと駄目なのか。例えば一体化するという選択は。

館長 最初に図書館、コンピューター・センターと教育系センターの協力の下にセンターを作ったということの意味は、大学の組織上の位置づけとしては図書館は教育研究組織ではないという弱点を、図書館が何か新しい機能を展開することだけでは乗り切ることができないという判断をしたということである。つまり図書館のまま、教育や研究に対して直接的に関与して行動することは組織上難しい。だからこそ別の学内共同利用組織としてアカデミック・リンク・センターを作ること、図書館がセンターを介する形で、教育・学習に直接的に関与するという道を開いたということになる。このモデルが順調に進めば、図書館とアカデミック・リンク・センターを組織的に一体化するという方向もないわけではない。

国立学校設置法がなくなり、「国立大学に図書館を置く」という文言はもはやない。ただ、大学設置基準では「図書館」という設備は残っており、それとの整合性をどうとるかという

問題はある。しかし、慶應義塾大学のように建物としてサービスを行う図書館と、組織として運営していくメディアセンターは別でも構わないとも言える。

議長 図書館職員は他大学異動もあるが、そうすると、施設の項目にある複数の業務システムを引き継いでいく工夫が必要ではないか。機関リポジトリなどはよいとしても、千葉大図書館独自の、アカデミック・リンク・センターと連動したシステムを持続可能なものにしていくためには支障ない状況にあると思ってよいか。

千葉大職員 Moodle やレコピックシステムなどはセンター教員と一緒に働きつつ動かす形で今のところ継承できている。今後それをずっと維持できるかは課題である。

千葉大職員 それぞれ単体システムであり、例えば統合しようという話になると非常に難しいと思う。現在は必要な機能を小さなシステムとして作り、それを維持している。

委員 Moodle は図書館以外にも入っているか。

館長 Moodle は図書館というよりアカデミック・リンク・センターが運営しているもので、全学教育センターと共同運営の形である。特任助教が1名ついて、プロジェクト雇用の非常勤技術職員がサポートする。ハード面は学務部で予算措置をして、統合情報センターで管理している大型ハードウェアに乗っており、その基本経費は図書館ではなく学務部が負担している。こういった基幹システムの場合、注意が必要なのは、電子ジャーナルも同様だが1度業務と予算を担ったところに責任があるかようになってしまうことである。Moodle はそうならないように図書館のシステムではないと位置づけ、安定的に運営できるように考えている。

委員 利用者用の貸出 PC が非常によく使われているが、管理が大変ではないか。貸出用をシンクライアントにし、大学として管理運営を一体化した方がコスト的にも運用的にも効率性が高いので、そういうところは図書館があまりこだわらず専門家に任せたいほうがいいのかもしれないと感想を持った。

館長 学生用端末は前回のリプレイス時も要求したが通らなかった。端末増設要求は難しい。学生が自由に打ち出せるプリンタも図書館では設置しておらず、USB にコピーして、それを図書館の複写機を使って印刷する形である。プリンタを置いた場合、管理はどこがやるのかという話になり、学生サービスのためになることも話を出した部局が全部担うという形になりがちで、やりきれないから口が出せないとなる。5 年前に設置型ではないシンクライアントという要望も出したが当時はできなかった。今は技術的には可能ではないかと思うが。現在、貸出用 PC25 台は技術支援学生アシスタントの ALSA-TT（アルサ・ティーティー、

Academic Link Student Assistant Technical Team) が週に 1 回メンテナンスをして管理している状況である。

委員 今はシンクライアントも 5 年前とは違っており、やり方はあるはずである。今後はおそらく外部のクラウド環境でセンターシステムを動かしていく方向に移行していくだろうが、そういう状況で図書館の抱えているシステムの見直しをしていく必要は出てくると思う。5 年ぐらいのスパンで考えていく必要があるのでは。

館長 次のシステムリプレイスの時には学生用端末を大学が整備するという選択はおそらくないのではないかと。学生自身が持ってくるという方法もあるが、持てない学生はどうするかということは図書館の問題ではなく、情報基盤として誰が担当するかという問題になると考えている。

委員 大学が購入させる、あるいは少し古いが大学が貸与する等色々なやり方がある。

館長 教育として使う場合、学生が個人で購入したものに全て同じソフトを入れることにもなるのでなかなかハードルが高い。

委員 今の所蔵冊数は 103 万で本館収容冊数が 109 万とほとんど差がない。当面は重複や返戻で減っていくものが多いと思うが、もう少し先の展望はどのようになるか。

千葉大職員 当面は仰るとおり均衡した数で推移している。今後のオプションとして、学内 3 館での雑誌の重複分整理、電子ジャーナルでバックファイルのあるものの除籍は考えている。電子ジャーナルがあるものの除籍は、いまお茶の水・横国・千葉の三大学連携で実験を開始し、SpringerLink でバックファイルがあるものについて、1 校が残せばいいという協定を作ろうとして動向を見ている。

委員 紙の資料は増やさないという明確なポリシーを持っているわけではないのか。収容冊数に対して現状もかなりいっぱいを感じるが。

館長 西千葉キャンパスではまだかなりの資料が研究室に散らばっている。ただ、いずれ研究室から返ってくるものをどう対処するかは大きな問題である。

三大学連携を始めた最大のポイントは、シェアード・プリントの実現で、バックファイルがあるものから始めたが、意外に減りそうにない。そのために手間暇かけるのはいかがかというので、議論が進まない部分はある。ただ、現時点では分館も含めたバックナンバー所蔵の調整をやっているわけではないので、まずはそれをきちんとやる必要がある。とりわけ松戸分館は図書館が小さいにも関わらず相当量のバックナンバーがあり、見た限りそんなに使

わないものもあるという印象で、これをどう考えるかは大きな課題である。

また亥鼻分館は建物の場所がキャンパスの中心から徐々に外れつつあり、来館を前提としたサービス展開はキャンパスの学生の動線から考えても必ずしもベストではないという考え方もできる。そうするとサービス拠点を新たに作られる医学部の建物などに置く形で、それをサポートするような機能のみ図書館に残すという話も出てくるかもしれない。

委員 館長のお話にも出てきたが、学生用図書費が少ない。

館長 来年度から若干改善できる目途はたった。図書館資料費で買っていた電子ジャーナルのパッケージを（学内各部局から拠出される）学術基盤資料費に移すことが決まっている。

委員 図書が和・洋合わせて約 3500 万円となっているのは、（研究室に置く）教員の研究用図書も含めた額か。

千葉大職員 過去のものはあるがほぼ図書館の蔵書である。

議長 この選書は、学術資料専門部会か。

千葉大職員 選書は図書館内に常勤職員の選書ワーキンググループがあり、そこで選書をするものと、教員の推薦・学生の推薦という形で資料を選定してもらうものになる。学術資料専門部会は主にジャーナル系でどれを継続するかについて検討する。

委員 電子ジャーナルは、学術資料専門部会が適宜対象として、研究担当理事の下にあると先ほどかがったが、一般の図書館資料は、教育担当理事の下にあるような位置づけにはなっていないということか。

館長 現在はなっていない。昨年度までは全学教育に関わる教育担当理事をトップとする高等教育研究機構の教育総合推進部門のもとに図書館専門部会があり、報告・検討は教育担当理事に上げる形になっていた。しかし全学的教育組織の見直しのなかで専門部会の組織が再編された。そのため全学的図書館サービスに関しては部局としての図書館が独自に図書館委員会を設置して、必要に応じて助言をいただく形をとっている。例えば選書に関する基本的方針等は、そこで決定したものに則って我々が通常業務を行う。

委員 その場合、図書館長以下の内部が盲腸線のようになってしまって、上と切れてしまう懸念がある。電子ジャーナルは縦の系列が明確だが、学生用図書や図書館内に配置される資料は、上との関係が切れた形になっていないか。そこは重要性が薄れてきているのかもしれないが、気になるところである。

館長 ガバナンスという観点では、館長のリーダーシップという説明がされる。

委員 現在は非常にうまくいっているというのは理解している。来年度に予算が増えることもそうだが、個人のパーソナリティに依存するのは組織として危険なので、ガバナンスの面では仮にそこが変わったとしても、ある程度の一定性は担保できる仕組みのほう望ましい気がする。

館長 図書館の運営で誰に対して報告義務を持つかということこれは学長になる。図書館の様々な方針、最終決定は学長のガバナンスのもとで図書館長に付託されていると判断するしかないと思っている。ジャーナルに関しては、研究戦略としての電子ジャーナルということ館長就任以来強く主張してきた。その枠のなかで、ジャーナルの予算等について実務的なものは図書館に殆ど任されているが、全学的な方針については局長、研究担当理事、学長の了解をとって進めている。

委員 他大学に比べて教員との接点が非常に多いのが千葉大図書館の特徴だと思う。授業資料ナビゲータ作成と Moodle、機関リポジトリ。あかりんアワーも企画などはアカデミック・リンクで、それぞれの事業ごとに教員と接点を持つ形になるのか。

館長 そうである。

委員 機関リポジトリの利用というのは、見方にもよるが、教員との接点からいったら、あえてプロモートする必要はもうそれほどないのかもしれない。

館長 千葉大学としてはオープンアクセス方針を採択しており、これをゴールドで進めるかグリーンで進めるかということは明確には言っていないが、機関リポジトリを中心としたオープンアクセスは推進している。学内紀要は全て機関リポジトリ経由で発信されており、学位論文も問題なく流通しているという状況だが、学術コンテンツの流通の可視性を高めることで、この流通に関わっているのは図書館であるということをきちんと見せたい。それは重要な戦略ではないかと考えている。

電子ジャーナルのおかげで図書館に全く来ない理系の教員がたくさんいるが、そういう人たちからすると、電子ジャーナルのサービスが止まると騒ぎになるが、止まらない限り図書館は空気みたいなものでしかない。その状況で関心が持たれないのでは困るわけで、機関リポジトリのようなもので教員の情報発信はここでやっているともう少し見える形にしたい。機関リポジトリをベースにして、例えばオーバーレイジャーナルということで、コンテンツを全部機関リポジトリにおいて、そのウェブページをつくることで雑誌が存在しているものもある。それを全部図書館ウェブサイトで千葉大の研究発信としてこれをやっていると思

せたい。それから他大学でも実施されているが、いわゆる「上位 1%論文」・「上位 5%論文」と言われているような非常に引用率の高い論文については、機関リポジトリにコンテンツを入れて、この分野のトップ論文であるを見せていくことも研究戦略上も重要ではないかと思っているので、そのあたりについては学内でも相談をしたい。

委員 図書館が研究展開にいかに関わるかということ。

館長 そこは 29 年度以降のアカデミック・リンクの大学院を含めた新しい取り組みのなかで議論したい。

委員 電子ジャーナルが学術研究推進機構のほうにあるという点で、附属図書館が研究に関わる足がかりを持てているのはいい面なのかもしれないと思う。

館長 今の件について若干補足すると、教育と研究で分けて考えれば、研究の部分はさっき申し上げたように電子ジャーナルをコアとして研究戦略に位置づけて、研究担当理事の下にある研究推進の仕組みのなかにある。

教育に係る部分は、学長をトップとし、その下に教育担当理事がいる国際未来教育基幹という枠組みにアカデミック・リンク・センターが入っているので、教育と関わる部分は図書館がそこで教育担当理事とひとまずつながっていることになる。

言わばそのすき間が図書館としての部分で今やその比重は高くない。資料を買う、あるいは学生用図書を整備するということは残っているが、それも教育のためのリソースをどうするかというふうに考えればアカデミック・リンクの枠に入れてしまえるので、図書館という組織もあり、トップも人もいるが、実質的には、アカデミック・リンクというフレームワークと研究戦略というフレームワークに取り込まれていると言えるかもしれない。

千葉大学附属図書館
点検・評価委員会／外部評価委員会
資料集

評価期間 平成 25 年度～27 年度

各調査データについて、特に断りがないものは「学術情報基盤実態調査」による

1. 附属図書館の概要

千葉大学は、9 学部からなる総合大学(平成 27 年度時点)で、キャンパスは、西千葉(メインキャンパス。文・法政経・教育・理・工学部、他多数の施設)、亥鼻(医・薬・看護学部・医学部附属病院等)、松戸(園芸学部等)、柏の葉(環境健康フィールド科学センター等)の 4 箇所に分かれている。附属図書館は、本館及び 2 つの分館で構成されており、各キャンパスの専門領域や人員構成に対応して下記のような特徴を有している。

- ・ 本館(西千葉キャンパス): 特定分野に限らない総合的な蔵書構成。
- ・ 亥鼻分館(亥鼻キャンパス): 医学・薬学・看護学関連資料を中心に所蔵。
- ・ 松戸分館(松戸キャンパス): 園芸学・農学関連資料を中心に所蔵。

本館は、学部初年次には全学部生が西千葉キャンパスを中心に学習することから、教養課程から各専門分野まで対応する総合的な図書館であり、近年は後述するアカデミック・リンクの実践の場として学習支援活動を積極的に実践している。一方、両分館はそれぞれの分野に特化した専門図書館としての機能を強く持っている。

1.1. アカデミック・リンク機能の推進

アカデミック・リンクは、千葉大学において「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ『考える学生』を育成するために、附属図書館、総合メディア基盤センター(現・統合情報センター)、普遍教育センター(現・全学教育センター)が協力して立ち上げた、教育・学習のための新しいコンセプトであり、その実現のために平成 23 年度にアカデミック・リンク・センターが発足した。あわせて附属図書館本館の増改築が順次行われ、平成 26 年度に異なった機能を持つ 4 つの棟の整備が完了し、アカデミック・リンクのコンセプト「学習とコンテンツの近接による能動的学習」を促進する取り組みが実施されている。

附属図書館は、アカデミック・リンク・センターの事務部門を担い所属教員による活動を支えているが、それにとどまらず図書館職員が教員と協力してアカデミック・リンク機能の実践を進めている。具体的には、「コンテンツ形成(旧コンテンツ・ラボ)」「人的支援(旧ティーチング・ハブ)」「空間整備・評価(旧アクティブ・ラーニング・スペース)」という 3 つの機能を柱として多様なプロジェクトを実施することで新たな学習環境の提供を行っている。(詳細は、「大項目 8. アカデミック・リンク・プロジェクト」を参照)

1.2. 中期目標・中期計画に係る活動

各国立大学法人は、達成すべき業務運営に関する目標と、それを達成するための計画を、中期目標・中期計画として 6 年毎に策定しているが、本評価期間の平成 25～27 年度は、第 2 期中期目標期間(平成 22～27 年度)にあたっている。千葉大学では、『千葉大学憲章』に掲げた「つねに、より高きものをめざして」という理念を具現化し、使命を達成するための目標・計画を定めている。

その中の情報化技術を用いた教育方法の開発・充実や教育環境の整備・充実、快適な学習環境の実現といった点について、附属図書館／アカデミック・リンク・センターは、積極的な取り

組みを行ってきた。その成果は、各年度毎に行われる業務の実績に関する評価において、平成 23 年度以降毎年「戦略性が高く意欲的な目標・計画」として取り上げられている。平成 25～27 年度については、下記のとおりである。

平成 25 年度：

- ・電子教材の開発に関する共同研究講座を設置した。
- ・学習のための教材コンテンツを電子的に利用するための環境整備に向けて、複数の大学が参加するコンソーシアムの発足を準備した。

平成 26 年度：

- ・授業の事前事後学習を深めるための有益な図書やウェブサイトを案内する「授業資料ナビゲータ」を作成した。
- ・学習のための教材コンテンツを電子的に利用するための環境整備に向けてコンソーシアムを発足させ、関係機関との協議等を展開した。

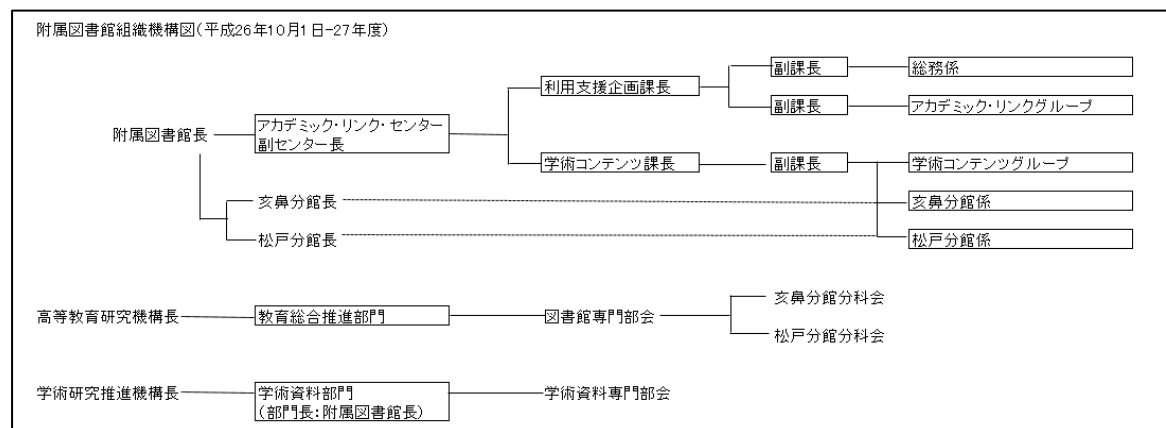
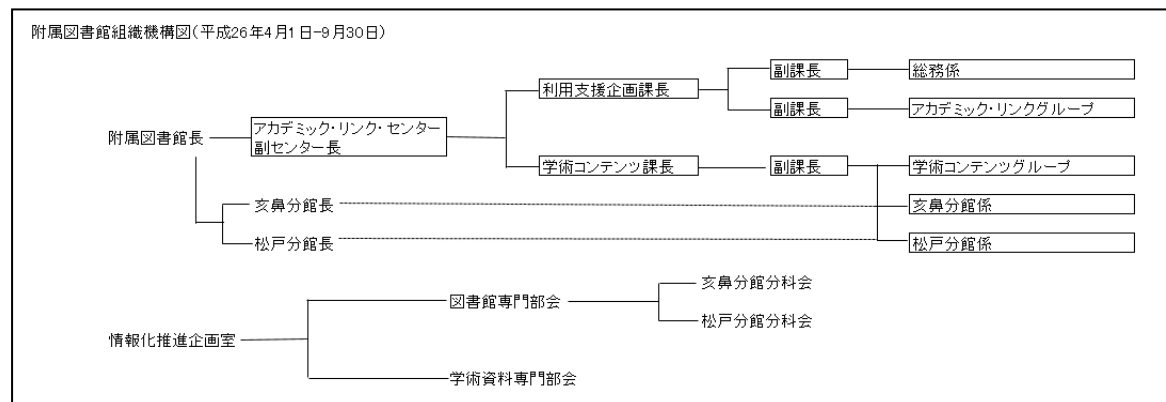
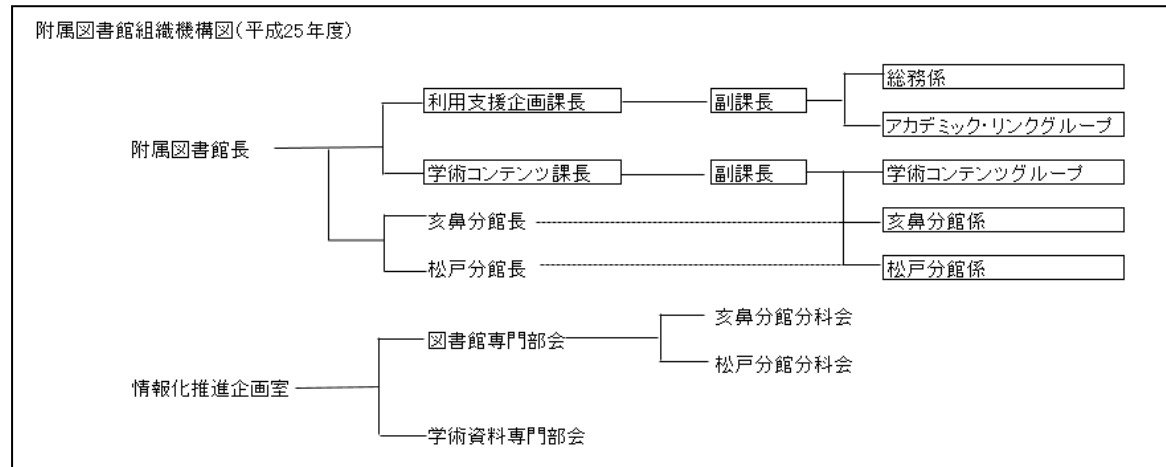
平成 27 年度：

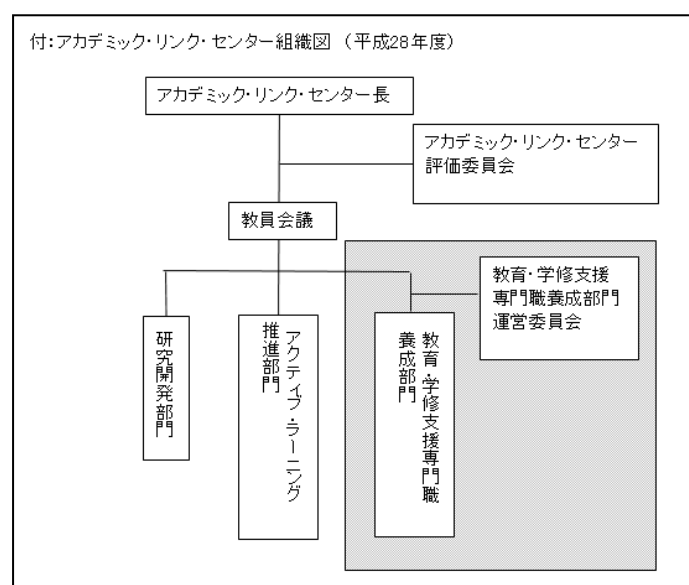
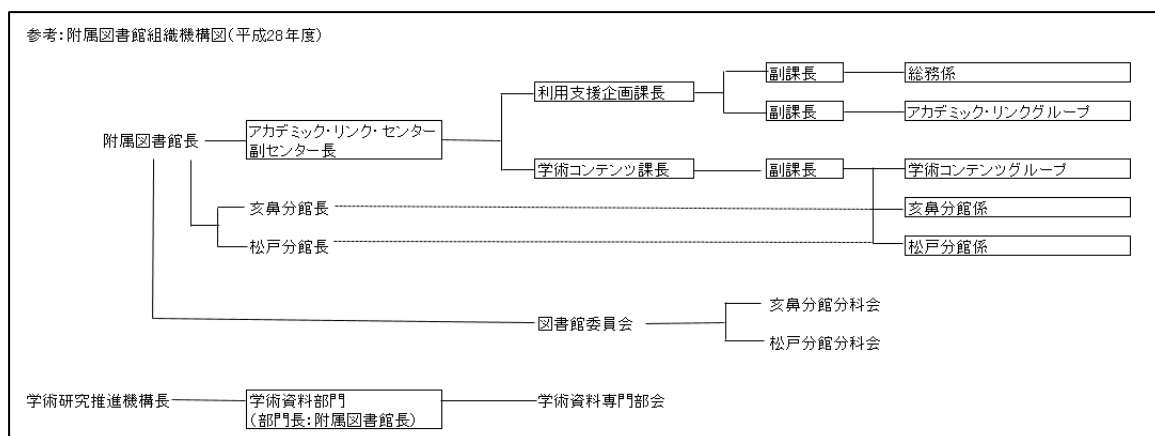
- ・スチューデント・アシスタントによる学習サポート(434 件)およびレポート作成セミナー(7 回開催, 200 名参加)を実施した。
- ・PDA 方式(一定期間大量のコンテンツが利用可能な環境を用意し、その閲覧回数にもとづいて購入タイトルを決定する方式)による電子書籍購入を導入し、利用者の要求に対応したコンテンツ整備を実施した。

2. 管理運営

2.1. 運営組織

平成 26 年度, アカデミック・リンク機能強化のため, アカデミック・リンク・センター副センター長が部長相当職として配置された。また, 同じく利用支援企画課副課長が 1 名増員となった。専門部会については 2.2 を参照。





職員種別	本 館	亥鼻分館	松戸分館	合 計
専任	19	2	2	23
臨時	19.3	4.9	0	24.2
業務委託等	6	4	4	14
計	44.3	10.9	6.0	61.2

2.2. 専門部会

平成 18 年度，情報化推進企画室の下に「図書館専門部会」と「学術資料専門部会」が設置された。図書館専門部会は附属図書館のサービスに係る検討・提言，学術資料専門部会は学術資料の整備・提供および学術情報発信に係る検討を目的とする。

平成 26 年 10 月，情報化推進企画室の改組に伴い，図書館専門部会は高等教育研究機構教育総合推進部門，学術資料専門部会は学術研究推進機構学術資料部門にそれぞれ設置となった。

（図書館専門部会は評価期間後の平成 28 年度廃止，附属図書館に図書館委員会設置）

活動状況

開催日	
平成 25. 11. 14	図書館専門部会
平成 26. 5. 22	図書館専門部会
平成 27. 3. 30	図書館専門部会
平成 27. 7. 17	図書館専門部会
平成 28. 2. 15	図書館専門部会
平成 25. 6. 27	学術資料専門部会分科会
平成 25. 7. 23	学術資料専門部会
平成 25. 11. 14	学術資料専門部会
平成 26. 5. 22	学術資料専門部会
平成 26. 6. 11	学術資料専門部会分科会
平成 26. 7. 16	学術資料専門部会分科会
平成 26. 7. 23	学術資料専門部会分科会
平成 26. 8. 4	学術資料専門部会
平成 26. 12. 25	学術資料専門部会
平成 27. 2. 3	学術資料専門部会分科会
平成 27. 2. 24	学術資料専門部会分科会
平成 27. 3. 18	学術資料専門部会分科会
平成 27. 3. 30	学術資料専門部会
平成 27. 7. 17	学術資料専門部会
平成 28. 2. 15	学術資料専門部会

(参考 1)

国立大学法人千葉大学高等教育研究機構教育総合推進部門図書館専門部会要項

(趣旨)

第1条 この要項は、国立大学法人千葉大学高等教育研究機構教育総合推進部門規程第7条第2項の規定に基づき、国立大学法人千葉大学高等教育研究機構教育総合推進部門図書館専門部会（以下「専門部会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 専門部会は、本学附属図書館（本館、亥鼻分館、松戸分館）のサービスについて検討・提言することを目的とする。

(業務)

第3条 専門部会は、次に掲げる業務を行う。

- 一 全学的な図書館サービスにかかる方針の策定に関すること。
- 二 その他附属図書館に関すること。

(専門部会長)

第4条 専門部会に、専門部会長を置く。

- 2 専門部会長は、教育総合推進部門長が指名する者をもって充てる。
- 3 専門部会長は、専門部会の業務を総括する。

(構成)

第5条 専門部会は、次に掲げる者をもって構成する。

- 一 附属図書館長
 - 二 附属図書館亥鼻分館長及び松戸分館長
 - 三 統合情報センター長
 - 四 文学部、教育学部、法政経学部、各研究科（教育学研究科を除く。）、各研究院、普遍教育センター及び国際教育センターから選出された教授各1名
 - 五 学務部長
 - 六 その他専門部会が必要と認める者
- 2 前項第4号及び第6号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(構成員以外の参画)

第6条 専門部会長は、必要と認めるときは、構成員以外の者を専門部会に参画させることができる。

(分科会)

第7条 専門部会に、分館等の事項について協議する分科会を置くことができる。

- 2 分科会に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第8条 専門部会の事務は、附属図書館利用支援企画課において処理する。

(雑則)

第9条 この要項に定めるもののほか、専門部会に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この要項は、平成26年10月1日から施行する。
- 2 第5条第1項第4号及び第6号の規定により最初に委員となった者の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、平成28年3月31日までとし、再任を妨げないものとする。

(参考2)

国立大学法人千葉大学学術研究推進機構学術資料部門学術資料専門部会規程

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人千葉大学学術研究推進機構学術資料部門規程第8条第2項の規定に基づき、国立大学法人千葉大学学術研究推進機構学術資料部門学術資料専門部会（以下「部会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 部会は、国立大学法人千葉大学（以下「本学」という。）における学術資料の整備・提供及び学術情報の発信について、検討することを目的とする。

(審議事項)

第3条 部会は、次に掲げる事項について審議する。

- 一 本学における学術資料の整備・提供に関すること。
- 二 本学における学術情報の発信に関すること。
- 三 その他学術資料及び学術情報に係る研究基盤の強化に関すること。

(部会長)

第4条 部会長は、附属図書館長をもって充てる。

- 2 部会長は、必要に応じ部会を招集し、その議長となる。
- 3 部会長に事故あるときは、部会長があらかじめ指名した分館長が、その職務を行う。

(構成)

第5条 部会は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- 一 部会長
- 二 附属図書館亥鼻分館長及び松戸分館長
- 三 統合情報センター長
- 四 文学部、教育学部、法政経学部、各研究科（教育学研究科を除く。）及び各研究院から選出された教授 各1名

五 その他部会が必要と認めた者

2 前項第4号及び第5号の構成員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の構成員の任期は、前任者の残任期間とする。

(構成員以外の参画)

第6条 部会長は、必要と認めるときは、構成員以外の者を部会に参画させることができる。

(分科会)

第7条 部会に、専門の事項について調査・検討する分科会を置くことができる。

2 分科会に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第8条 部会の事務は、附属図書館利用支援企画課において処理する。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、部会に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規程は、平成26年10月1日から施行する。

2 第5条第1項第4号及び第5号の規定により最初に構成員となった者の任期は、同条第2項本文の規定にかかわらず、平成28年3月31日までとし、再任を妨げないものとする。

2.3. 耐震改修・増築・機能改修

2.3.1. 経緯

平成 22 年度の概算要求で措置された附属図書館改修増築工事は、K 棟(旧館)の耐震改修を第 1 期工事、N 棟、I 棟の新築を第 2 期工事として着工したが、平成 23 年 3 月の東日本大震災の影響等から竣工時期が大幅に遅れ、平成 23 年 10 月に K 棟がリニューアルオープンした。また、同時に平成 23 年度国立大学教育研究特別整備費の配分を受け、什器や無線 LAN 設備などの整備を行った。平成 24 年 3 月に竣工記念式典を挙行し、N 棟、I 棟を含めた附属図書館がフルオープンした。N 棟には対話をしながら学習ができる新しいコンセプトの空間(アクティブ・ラーニング・スペース)を設置した。

平成 23 年度から運営費交付金特別経費(プロジェクト分)が認められ、平成 23 年 4 月にアカデミック・リンク・センターが設置された。平成 24 年 3 月の建物のオープンに伴い、アカデミック・リンクの活動を本格的に開始した。

平成 24 年度になって本館で最後に残った L 棟(新館)の機能改修が俎上に上り、平成 26 年度の概算要求を行った。施設環境部との打合せにより概算要求内容は L 棟の増築及び改修と決まり、情報化推進企画室図書館専門部会への報告を経て、文部科学省に提出された。この要求事項は当初予定より早まり、平成 24 年度の補正予算として認められた。

松戸分館についても平成 24 年 8 月に小規模なアクティブ・ラーニング・スペースが設置された。また、亥鼻分館も同時期にアクティブ・ラーニング対応の什器を導入した。

2.3.2. 進展

平成 25 年 11 月から本館改修工事が始まり、平成 26 年 10 月に完了した。L 棟には、アクティブ・ラーニング・スペースを増設するとともに、キーボードのある機器やイヤフォン等の利用も制限した完全に静かな学習空間(静寂閲覧室)を設置し、学生の多様な学習要求に応えられるよう配慮している。また、カフェのような雰囲気を持ち学習の合間のリフレッシュも意図した空間(ラウンジ)、授業紹介動画を流せる大型ディスプレイ等配置した情報発信エリア(ブックハウス)も整備され、更に機能を拡充した。

また亥鼻分館は平成 27 年 12 月に 2 階グループ閲覧室を転用し、会話可能エリアを試行的に設置した。松戸分館も平成 24 年度設置のスペースが狭小であることから、新たに可動式什器やホワイトボード 20 台を配置する等して、平成 27 年 11 月に「アクティブラーニングエリア」の利用を開始した。

2.4. 防災対策

平成 23 年 3 月の東日本大震災の際には、本館(昭和 43 年建築)は耐震改修工事の準備中で、図書館の資料の搬出は終わっており、使用可能なエリアの図書数千冊は落下したが、特に人的被害はなかった。古い積層型書庫は改修時に撤去された。

平成 24 年度に K 棟改修および N・I 棟増築、平成 26 年度に L 棟改修が行われ、本館の全ての建物の整備が完了した。その際、書架をアンカーで固定するなど防災上の補強を施している。平成 26 年度以降は、整備された建物にあわせて、全学の防災訓練とは別に図書館独自の訓練を実施している。本館は、4 つの建物で構成され避難経路も複雑であるため、実際の災害発生時には職員による円滑な避難誘導が重要である。そのため、訓練では地震や火災の発生を想定し、定められた役割に沿って全職員が行動する実践的な形式を採用している。また平成 27 年度の訓練では、学内の総合安全衛生管理機構より講師を招き、一次救命処置の研修として、講演と AED(自動体外式除細動器)実習を行った。

亥鼻分館ではキャンパスの防災訓練に加え、消防器具や避難設備・経路の確認、利用者に対する避難誘導訓練を行った。

松戸分館は、キャンパスの自主防災体制に組み込まれており、毎年避難・救護訓練を実施している。

防災用品としては、飲料水、食料、簡易トイレ、毛布、ヘルメット等を本館および亥鼻、松戸の両分館に備蓄している。また、AED は本館と亥鼻分館については館内に、松戸分館については隣接する管理棟に設置されている。

2.5. 人材育成・研修

年度初めに人材育成のため研修情報の館内共有を図り、職位研修・業務に係る研修について、計画的、積極的に職員の受講をすすめている。

研修等受講者数

学外／学内	名称	平成25年度	平成26年度	平成27年度
学外	マネジメント・セミナー (国立大学図書館協会)	2	2	3
学外	関東甲信越地区国立大学図書館職員 研修会(国立大学図書館協会)	1	1	-
学外	関東甲信越地区フレッシュパーソンセ ミナー(国立大学図書館協会) ※平成26年度は東京地区協会・関東 甲信越地区協会合同	2	2	-
学外	東京地区協会職員企画による研修 (国立大学図書館協会)	-	1	-
学外	大学図書館職員長期研修(筑波大学)	1	-	1
学外	大学図書館職員短期研修 (東京大学附属図書館)	1	2	1
学外	学術情報ウェブサービス担当者研修 (国立情報学研究所)	1	-	-
学外	学術情報システム総合ワークショップ (国立情報学研究所)	-	1	1
学外	学術情報リテラシー教育担当者研修 (国立情報学研究所)	1	-	-
学外	機関リポジトリ新任担当者研修 (国立情報学研究所)	-	-	1
学外	情報処理技術セミナー (国立情報学研究所)	-	1	-
学外	目録システム講習会(雑誌コース) (国立情報学研究所)	2	1	-
学外	目録システム講習会(図書コース) (国立情報学研究所)	-	2	-
学外	科学技術情報研修(国立国会図書館)	1	-	-
学外	図書館等職員著作権実務講習会 (文化庁)	1	-	2
学外	千葉市図書館情報ネットワーク協議会 研修会(千葉市)	1	-	-
学内	幹部職員研修	1	3	1
学内	副課長級研修	1	1	-
学内	係長(専門職員)研修	-	2	2
学内	新採用職員研修	1	-	2
学内	事務系情報セキュリティ講習会	-	6	6
学内	事務情報化講習会	2	3	-
学内	事務職員向け広報研修	-	-	6
学内	ハラスメント防止に関する講演会	1	4	1
学内	メンタルヘルス講習会	-	4	2
学内	若手職員スキルアップ研修	-	1	-
学内	放送大学受講	2	7	5
学内	語学研修	1	-	1
学内	TOEIC受験	3	4	8
学内	中国語検定試験	-	-	1

3. 予算・経費

3.1. 図書館資料費

図書館資料費のうち、図書費は、特に学生用図書費について館外経費を獲得することで平成 24 年度数値から微増を保っている(33,214→34,818 千円)が、一方、電子ジャーナルは 240,177→342,480 千円と 1.4 倍超となっており、他大学と同様、本学でも電子ジャーナル費用が他の資料費を圧迫している傾向が読み取れる。

大学総経費に占める資料費の割合はわずかながらも拡大しているものの、国立大学法人平均、および 8 学部以上の区分 A の機関平均ともやや下回る数値である。

図書館資料費の内訳平成 27 年度実績本・分館合計（千円未満四捨五入）

図書				34,818 千円
			和	19,891 千円
			洋	14,927 千円
雑誌				48,338 千円
			和	18,179 千円
			洋	30,159 千円
電子 ジャーナル	出版社	国内	1,757 千円	
		国外	329,244 千円	
		計	331,001 千円	
	その他	国内	2,388 千円	
		国外	9,091 千円	
		計	11,479 千円	
	計	国内	4,145 千円	
		国外	338,335 千円	
		計	342,480 千円	
電子書籍・ データベース	電子書籍	国内	3,889 千円	
		国外	3,644 千円	
		計	7,533 千円	
	データ ベース	国内	5,117 千円	
		国外	36,793 千円	
		計	41,910 千円	
	計	国内	9,006 千円	
		国外	40,437 千円	
		計	49,443 千円	
その他				6,512 千円
図書館資料費(合計)				481,591 千円

図書館資料費の経年変化

(単位:千円)

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
大学総経費	64,115,672	67,101,753	63,612,323
本館資料費	361,705	428,542	440,042
玄鼻分館資料費	35,440	28,960	32,211
松戸分館資料費	8,820	8,769	9,338
(本分館合計)	405,965	466,271	481,591

大学総経費に占める図書館資料費の割合

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
千葉大学	0.6%	0.7%	0.8%
全国平均(国立大学 全体)	0.8%	0.8%	
全国平均 (国立大学 区分A[8学部以上])	0.9%	0.9%	

3.2. 図書館運営費

図書館運営費は減少傾向にあり、大学総経費に占める割合はここ数年 0.5%止まりとなっている。国立大学法人の全体および区分 A の機関平均よりやや低い数値が続いている。

図書館運営費の内訳平成 27 年度実績本・分館合計（千円未満四捨五入）

人件費	202,908 千円
その他の経費	88,946 千円
図書館・室運営費(合計)	291,854 千円

図書館運営費の経年変化

(単位:千円)

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
大学総経費	64,115,672	67,101,753	63,612,323
本館運営費	278,165	261,653	225,924
亥鼻分館運営費	41,620	49,528	40,120
松戸分館運営費	24,744	26,682	25,810
(本分館合計)	344,529	337,863	291,854

大学総経費に占める図書館運営費の割合

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
千葉大学	0.5%	0.5%	0.5%
全国平均(国立大学 全体)	0.7%	0.7%	
全国平均 (国立大学 区分A[8学部以上])	0.7%	0.7%	

3.3. 概算要求

3.3.1. 経緯

平成 8 年度に亥鼻分館新営が実現した後、従前から附属図書館の課題であった本館(旧館)の増改築を概算要求の大きな目標と定め、本格的に取り組みを開始した。平成 11 年度には総合メディアホール(仮称)として現在の要求の原型が作られ、その後継続して施設整備費として概算要求を続けたが、実現には至らなかった。

その後、平成 20 年度に要求の過程で学内的にいくつかの大きな動きがあった。ひとつは、研究担当理事が室長を務める情報化推進企画室の下に総合メディアホール整備計画検討専門部会が設置され、総合メディアホール(仮称)の整備計画について学内での認知度を高めるために本格的に検討が開始されたことがあげられる。もうひとつは、その検討過程で施設環境部との定期的な打合せが開催されたことである。このことにより施設環境部に総合メディアホール(仮称)整備の重要性が認識され、大きな協力を得ることができた。3 点目としては、こうした検討の結果による総合メディアホールの必要性・重要性を年度末に学長や理事、部局長などに説明する機会が得られたことである。

これらの活動によって附属図書館増改築の概算要求は、学生への学習・教育支援機能を持った総合メディアホール(仮称)整備計画として具現化する素地が作られることとなった。

平成 21 年度には上記専門部会の下に設置されたワーキング・グループで概算要求の検討を重ね、関連諸会議、役員会報告、理事説明、学長説明などを経て学内理解を得た上で学内順位 1 位で文部科学省に要求を提出することができた。その結果、施設要求(耐震改修と増築)については、ほぼ要求通りの面積が概算要求として認められ、平成 22, 23 年度に「アカデミック・リンク」構想として、附属図書館旧館(現在の K 棟)の耐震改修及び新棟(N, I 棟)増築が行われた。工事途中で東日本大震災の影響を受けたため当初計画よりは遅れたものの、平成 24 年 3 月に一般利用を開始した。なお、この時整備された一連の建築は、平成 24 年度のグッドデザイン賞および千葉市都市文化賞に選定された他、文部科学省による「国立大学等の特色ある施設 2012」に取り上げられるなど、高い評価を受けている。

また、設備面では、平成 23 年度の国立大学教育研究特別整備費においてもアカデミック・リンク整備のための費用が措置され、什器、無線 LAN の整備等を行った。

3.3.2. 進展

平成 23 年度のアカデミック・リンク・センター発足以降、附属図書館は同センターと一体となり様々な活動に取り組んできた。その活動を推進するため、平成 23～26 年度にかけては「アカデミック・リンクによる千葉大学の教育改革」、平成 27 年度は「学士課程教育の改革に向けた新たな教学支援システムの構築」として、特別経費（教育研究プロジェクト分）予算を獲得しているが、さらなる機能強化を継続的に図るため、安定的な予算獲得の道筋をつける必要がある。

さらに、千葉大学における最優先の戦略・取組をまとめた『TOKUHISA PLAN』において明記されているとおり、アカデミック・リンク機能を全学的に展開することも大きな課題である。数年来の取り組みで附属図書館/アカデミック・リンク機能は強化されたが、活動の場は西千葉キャンパスが中心であり、他キャンパスにおいては充分とは言えない状況にある。特に松戸キャンパスについては、松戸分館の老朽化・狭隘化が著しく、学習環境に大きな支障をきたしている。平成 25 年度以降、具体的なプランを策定し、施設整備費として概算要求を行っているが実現には至っていない。早期実現に向けてより実効性のある取り組みを強力に進めて行く必要がある。

この他、アカデミック・リンク・センターは、平成 27 年度に教育関係共同利用拠点（「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点（教育・学修支援専門職養成）」）として文部科学大臣から認定され、そのための予算が措置されることとなった。このことにより、今まで行ってきたプロジェクトの成果をふまえ、全国の大学職員を対象とした、より高度で実践的な教育・学修支援専門職を余生するための取り組みを開始した。

4. 施設・設備

4.1. 延床面積と閲覧座席数

本館は平成 23, 26 年度に大規模な改築を行った。平成 26 年度の L 棟増築では閲覧座席が 50 席増加となり、固定席から可動式アクティブ・ラーニング向け閲覧座席への変更も行っている。

本館

K 棟(旧館)(RC3F 4,427 m²)昭和 43 年 4 月竣工, 平成 23 年 6 月改築(4,185 m²)

L 棟(新館)(RC4F 4,929 m²)昭和 56 年 2 月竣工, 平成 26 年 8 月増改築(5,543 m²)

I 棟(RC4F 2,123 m²)平成 23 年 12 月竣工

N 棟(RC4F 3,957 m²)平成 23 年 12 月竣工

亥鼻分館 昭和 46 年 3 月竣工(医学部分館, 1,128 m²)

新館(RC3-1 3,784 m²)平成 8 年 7 月竣工

松戸分館 昭和 38 年 4 月竣工(園芸学部分館), 増築部分(565 m² 計 1,009 m²) 昭和 58 年 3 月竣工

図書館名	延床面積 (m ²)	閲覧 座席数
本 館	15,808	1,485
亥鼻分館	3,784	263
松戸分館	1,009	128
合 計	20,601	1,876

参考:平成25年度千葉大学附属図書館外部評価報告書

図書館名	延床面積 (m ²)	閲覧座席数
本 館	15,257	1,435
亥鼻分館	3,784	259
松戸分館	1,009	128
合 計	20,050	1,822

4.2. 学生あたりの閲覧座席数

学生 1 人あたりの閲覧座席数は本館改築等により微増している。国立大学法人全体, および 8 学部以上の区分 A 大学の平均値と同等である。

学生数	閲覧 座席数	学生あたりの 閲覧座席数
14,779	1,876	0.13

参考:平成25年度千葉大学附属図書館外部評価報告書

学生数	閲覧座席数	学生あたりの 閲覧座席数
14,967	1,822	0.12

学生数は「大学構成調査票」(平成 27 年 5 月 1 日現在)による

(参考)

平成 27 年度学術情報基盤実態調査結果報告 1, 2-1

総括事項, 閲覧座席数

区分	閲覧座席数	学生数	学生あたりの 閲覧座席数
(国立大学)			
A	39,767	299,757	0.13
B	13,236	120,587	0.11
C	16,556	124,317	0.13
D	8,641	66,141	0.13
計	78,200	610,802	0.13
1大学平均	909	7,102	0.13

区分A: 8学部以上 (19校)
 区分B: 5~7学部 (16校)
 区分C: 2~4学部 (26校)
 区分D: 単科大学 (25校)

4.3. 収容冊数

本館および松戸分館が書架を増設し, 収容冊数にして計 100,000 冊弱の増となった。

図書館名	棚板延長 (m)	収容冊数 (冊)
本 館	39,297	1,091,583
亥鼻分館	11,975	332,639
松戸分館	3,375	93,750
合 計	54,647	1,517,972

参考: 平成25年度千葉大学附属図書館外部評価報告書

図書館名	棚板延長 (m)	収容冊数 (冊)
本 館	36,118	1,003,278
亥鼻分館	11,970	332,500
松戸分館	3,000	83,333
合 計	51,088	1,419,111

注) 収容可能冊数は { 棚板延長 (m) ÷ 0.9 × 25 } の式により算出されている(1段に25冊)

4.4. 利用者用 PC 台数

※数値はいずれも附属図書館内調査

教育用端末(統合情報センター管理。千葉大学所属者が利用可能なデスクトップ PC)を含め、3館合計で141台を利用者用としている。内訳は以下のとおり。

本館貸出用端末は非常によく利用されており、平成27年度の利用は9,500回近くとなった。このため評価期間後の平成28年度は更に10台を追加した。また教育用端末が設置されている本館N棟3階の席は試験期間中などたびたび満席となり、こちらも需要が多いことがわかる。

利用者用PC	本 館	亥鼻分館	松戸分館
教育用	50	—	—
貸出用	25	—	—
情報検索用	2	10	8
OPAC用	10	1	—
印刷用	1	1	—
CALL(語学学習用)	4	5	4
情報リテラシー教育用ノートPC	—	20	—
合計	92	37	12

本館貸出用端末(ノートPC, タブレットPC)貸出回数

月	平成25年度	平成26年度	平成27年度
4月	184	292	578
5月	490	549	992
6月	508	561	1,362
7月	648	764	1,680
8月	150	166	398
9月	46	47	89
10月	283	364	794
11月	342	336	896
12月	333	345	943
1月	452	559	1,042
2月	195	320	603
3月	30	42	72
合計	3,661	4,345	9,449

4.5. 業務システム

平成 27 年度末現在, 図書館業務システムをはじめとした下記の各システムの運用を行っている。

■図書館業務システム

平成 23 年 6 月に更新し, NEC E-CatsLibrary の運用を開始した。サーバ機 4 台, バックアップ装置 1 台, 端末機 73 台(うち業務用 53 台, 情報検索用 20 台), プリンタ 15 台。

なお評価期間後の平成 28 年度に更新, 引き続き E-CatsLibrary を運用している。

■授業資料ナビゲータ作成支援システム

平成 24 年 1 月に導入, サーバ機 1 台。

■レコピックシステム

平成 22 年に導入, 平成 24 年 6 月に機器を増設。RFID による資料の利用頻度調査に使用(資料に IC タグを添付し計測)。管理 PC1 台, リーダライタ 5 台, アンテナ 40 枚。

■授業動画収録システム

平成 24 年 10 月に導入, 平成 25 年 9 月に機器を増設。収録システム 3 台, カメラ 4 台, カメラ用コントローラー1 台。

■Moodle(LMS, ラーニング・マネジメント・システム)

平成 22 年度本学に Moodle が導入された。平成 25 年 8 月に機器更新, サーバ機 2 台, 負荷分散装置 1 台。

■デジタルアーカイブシステム

平成 26 年 4 月に機器更新, サーバ機 1 台。

■学術成果リポジトリシステム

平成 23 年 6 月に機器更新, サーバ機 1 台。

5. 学術情報資源

5.1. 所蔵資料

蔵書冊数は、図書 139 万冊前後（本館 104 万冊、亥鼻分館 25 万冊、松戸分館 9 万冊）で安定している。図書受入と除籍冊数が均衡しており、適度な入替えが保たれている。

雑誌タイトル数も維持しており、購読継続が維持されている。

	本館	亥鼻分館	松戸分館	合計
平成25年度蔵書冊数	1,037,476	253,642	96,404	1,387,522
平成25年度図書受入冊数	8,385	2,368	631	11,384
雑誌所蔵タイトル数	15,136	5,490	3,563	24,189
雑誌受入タイトル数	3,109	1,185	438	4,732
新聞受入タイトル数	18	12	12	42
視聴覚資料タイトル数(CD,DVD,ビデオ)	2,885	896	323	4,104

	本館	亥鼻分館	松戸分館	合計
平成26年度蔵書冊数	1,041,709	254,303	95,674	1,391,686
平成26年度図書受入冊数	7,832	1,406	583	9,821
雑誌所蔵タイトル数	15,187	5,521	3,562	24,270
雑誌受入タイトル数	2,832	1,188	437	4,457
新聞受入タイトル数	18	12	12	42
視聴覚資料タイトル数(CD,DVD,ビデオ)	2,651	901	359	3,911

	本館	亥鼻分館	松戸分館	合計
平成27年度蔵書冊数	1,040,488	253,521	93,713	1,387,722
平成27年度図書受入冊数	8,550	1,195	659	10,404
雑誌所蔵タイトル数	15,690	5,717	3,986	25,393
雑誌受入タイトル数	3,101	948	559	4,608
新聞受入タイトル数	18	12	12	42
視聴覚資料タイトル数(CD,DVD,ビデオ)	2,681	970	432	4,083

新聞受入タイトル数は日本図書館協会「日本の図書館」調査提出データによる

5.2. 電子資料

※利用可能な電子ジャーナル・電子ブックタイトル数を除く数値は
いずれも附属図書館内調査

電子ジャーナルの契約はパッケージを中心に約 22,000 タイトルで維持されている。電子ブックについても、買い切り型のタイトルを中心に利用可能なタイトル数が増加している。

5.2.1. 電子ジャーナル・電子ブック

利用可能なタイトル数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
電子ジャーナルタイトル数	21,934	22,480	22,775
電子ブックタイトル数	20,276	21,372	21,954

電子ジャーナル利用統計(平成 27 年 1 月～12 月)

タイトル	アクセス数
American Chemical Society (ACS)	104,276
American Physical Society	17,624
Annual Reviews	1,199
BioOne	1,082
Cambridge University Press (CUP)	2,406
EBSCOhost Academic Search Premier	15,102
IEEE(IEL)	13,268
Journal of the Physical Society of Japan (JPSJ)	1,378
JSTOR Arts & Sciences I Collection	4,362
Nature Online (33タイトル)	90,628
Ovid	12,470
Oxford University Press	29,102
Project Euclid Prime Collection	131
ProQuest Health & Medical Complete	5,300
Rockefeller University Press	845
Royal Society of Chemistry	32,051
Sage	8,239
ScienceDirect	429,271
SpringerLink	67,653
Taylor & Francis	18,150
Wiley-Blackwell	122,128
CiNii (NII学術情報ナビゲータ)	445,676
情報処理学会サイトライセンスサービス	2,050
日経BP記事検索	19,805
メディカルオンライン	85,893

電子ブック利用統計(平成 27 年 1 月～12 月)

タイトル	アクセス数
Cambridge University Companions Online	51
EBSCO eBook Collection (旧 NetLibrary)	1,645
Maruzen eBook Library	3,453
Oxford Handbooks Online	155
Oxford Scholarship Online	35
Science Direct Book series	957
Web 版ステッドマン医学大辞典	2,522

5.2.2. データベース

利用可能なデータベース数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
全キャンパス共通	13	14	17
西千葉キャンパス限定	1	1	1
亥鼻キャンパス限定	2	2	2
松戸キャンパス限定	1	1	1
合計	17	18	21

データベース利用統計(平成 27 年 1 月～12 月)

タイトル	アクセス数	備考
CINAHL	40,457	
Cochrane Collection Plus	60,834	
EBSCOhost Academic Search Premier	24,724	
Europa World of Learning Online	統計提供なし	
Europa World Online	統計提供なし	
Gale Biography in Context	199	西千葉限定
Journal and Highly Cited Data (JHCD)	2,217	
LEX/DB	5,469	
LexisNexis at lexis.com	5,888	
Marquis Biographies Online	100	
MathSciNet	22,291	
MEDLINE	51,308	
MLA	37,050	
PsycINFO	31,003	
SciFinder(Academic)	136,561	
Scopus (平成27年3月末で契約終了)	統計提供なし	
Web of Science及び研究評価ツールInCites	31,563	
医中誌web	116,108	亥鼻限定
最新看護索引Web	統計提供なし	亥鼻限定
聞蔵Ⅱ 朝日新聞DB	2,369	
ジャパンナレッジ	61,433	
ブリタニカ・オンライン・ジャパン	4,815	
ヨミダス文書館	8,750	
ルール電子図書館	56	松戸限定

5.3. コレクション

本分館ともに、コレクションを所蔵し、貴重資料室に配架するとともに、一部はデジタル化を行っている。アダム・スミスコレクションについては、YouTubeに本学教員による解説動画を掲載して、外部公開している。

文庫名	数量	配架場所	由来等	内容	電子化
アダム・スミス コレクション	34点	本館	法経学部の収集書「アダム・スミスコレクション解題目録」平成9年刊	アダム・スミスの著書を中心にイギリス経済学関係の貴重図書	解説動画
郭沫若記念文庫	約3,000冊	本館	郭沫若氏（中国科学院長）の寄贈書	「四部叢刊」、「百衲本二十四史」、「説文解字詁林」等	
小池文庫	約7,600点	本館	小池新二教授の旧蔵書 「小池文庫目録」昭和61年刊	工業デザインを中心に、芸術、建築、社会、地誌、民俗、文学などの関連資料 雑誌、パンフレットを多数含む	目録
佐久間文庫	約1,200冊	本館	佐久間政一氏（旧制第二高等学校教授）の旧蔵書	ドイツ語学を中心にドイツ文学、芸術関係図書	
竹田文庫	488点	本館	竹田厚太郎教授の旧蔵書	ドイツ語図書を中心とするドイツ哲学関係資料	
田中（康一）文庫	約2,400点	本館	田中康一教授の寄贈書 田中完一氏の寄贈書	ドイツ語学、文学関係資料及び田中家所蔵の和漢書 古ドイツ語の音声記録の録音テープを含む	
田中（英明）文庫	1,040冊	本館	田中英明教授の旧蔵書 「田中文庫目録」昭和57年刊	経営学、経営管理関係図書	
手塚岸衛・ 自由教育文庫	67点	本館	手塚岸衛氏の蔵書 及び自由教育関連の諸資料	手塚岸衛氏の原稿と著作、千葉県師範学校関係の史資料等新聞切り抜き、写真を多く含む	
ハンガリー文庫	約770冊	本館	大使館の寄贈書 文学部の収集書	ハンガリー関係資料	
ブルガリア文庫	約930冊	本館	大使館の寄贈書 文学部の収集書	ブルガリア関係資料	
町野家文庫	約700点	本館	町野久衛氏の寄託資料 昭和44年作成の 目録（コピー）有り	千葉郡犢橋村（現千葉市花見川区犢橋町）旧名主の町野家所蔵の江戸期の古文書。貢租資料、宗門人別帳、訴訟記録等諸般にわたる。	
ユーラシア（徳永） 文庫	図書約3000冊、雑誌27タイトル	本館	東京外国語大学名誉教授、徳永康元氏（言語学、ハンガリー文学、1912～2003年）の膨大な蔵書の一部が金子亨本学名誉教授を経て寄贈された。	古書通、愛書家として知られ多趣味でもあった氏の蔵書内容は、文学、言語学、民族学、音楽、演劇等多岐にわたり貴重な資料が多い。	
吉武文庫	約3,000点	本館	吉武好孝教授の旧蔵書	英米文学を中心に、文体論、文章論関係資料、明治初期の翻訳文学書を数多く含む	
亘理文庫	訳600点	本館	亘理俊次教授の寄贈書	兵法、道徳、儒学、教育勅語関係	

文 庫 名	数 量	配架場所	由 来 等	内 容	電子化
古医書コレクション (東洋医学古書コレクション)	約5,500点	亥鼻分館	伊藤弥恵治教授の寄贈書 千葉弥次馬氏の寄贈書 佐倉順天堂旧蔵書 三宅しづ氏の寄贈書 等 「千葉大学附属図書館亥鼻分館古医書コレクション目録」2007年刊	明治以前の和漢医書・本草書ならびに西洋医学書, 更に一般歴史に関する図書も少なくない。「重訂・解体新書」「蘭学事始」「蔵志」「麻嶋流眼科秘伝」等の貴重書を含む	画像 (190点)
江戸・明治期園芸書コレクション	約70点	松戸分館	前身の千葉高等園芸学校設立(明治期)以来の収集品 故岩佐亮二名誉教授の収集品	江戸期以来の我が国の園芸の変遷, 発展をたどる上で重要な彩色図譜, 園芸書	画像 (18点)
小寺文庫	約7,500点	松戸分館	小寺駿吉教授の旧蔵書 「小寺文庫目録」昭和62年刊	造園学, 造園史関係資料 内外の地誌関係資料や公園緑地関係の図面を数多く含む	目録

(電子化点数は平成 27 年度末現在)

6. サービス

6.1. 利用対象者

学生数

	人数
学部・大学院学生	14,277
聴講生等	502
合計	14,779

教職員数

	専任	非常勤その他	合計
教員	1,173	1,189	2,362
職員	1,815	1,641	3,456
合計	2,988	2,830	5,818

大学構成調査票(平成 27 年 5 月 1 日現在)による

本・分館別奉仕対象数

	本 館	亥鼻分館	松戸分館	合 計
学生	11,053	2,509	1,217	14,779
教職員	2,256	3,340	222	5,818
合計	13,309	5,849	1,439	20,597

平成 27 年度日本図書館協会「日本の図書館」調査提出データによる

6.2. 開館時間

授業期間・試験期間・休業期間に区分し、試験期間の開館時間を延長している。本館において平成 25 年度の前期試験期間、後期の授業期間・試験期間に 8:30 開館を試行し、平成 26 年度から本実施している。

総開館時間(平成 27 年度)

	開館総時間数	うち時間外開館時間数
本 館	3,345	1,449
亥鼻分館	8,780	6,919
松戸分館	2,772	904

開館時間(平成 27 年度)

		本 館	亥鼻分館	松戸分館
授業期間	平日	8:30-21:45	9:00-21:45	9:00-21:00
	土日	10:30-18:00	10:30-20:00	12:30-16:30
	祝日	10:30-18:00	10:30-20:00	閉館
試験期間	平日	8:30-23:00	9:00-21:45	9:00-21:00
	土日	10:30-20:00	10:30-20:00	12:30-16:30
	祝日	10:30-20:00	10:30-20:00	閉館
休業期間	平日	9:00-16:45	9:00-16:45	9:00-16:50
	土日	閉館	閉館	閉館
	祝日	閉館	閉館	閉館

※亥鼻分館では、特別利用により教員および大学院生については 24 時間利用が可能

6.3. 利用実績

6.3.1. 入館者数

本館では、改築・整備の効果があり、入館者数が増加している。特に平成 27 年 7 月には 1 か月の入館者数としては過去最高の 91,602 名を記録した。

本館が一部改修中であった平成 25 年度には、本分館相互に補完しつつサービスをおこなっており、亥鼻分館の入館者数が多い。亥鼻分館、松戸分館ともに、アクティブ・ラーニング空間の整備などの館内整備に努め、平成 27 年度は前年度と比較して入館者数は回復している。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本 館	516,765	528,978	579,361
亥鼻分館	61,015	54,944	56,539
松戸分館	34,815	32,118	33,170
合 計	612,595	616,040	669,070

日本図書館協会「日本の図書館」調査提出データによる

6.3.2. 貸出冊数

貸出冊数は一定しており、安定した利用がみられる。学生 1 人あたりの貸出冊数は全国平均と比較すると少ないが、一方で入館者数が増加していることを勘案すると、図書館に求められる機能に変質しつつあることがうかがえる。

本・分館別貸出冊数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本 館	106,275	104,388	105,082
亥鼻分館	15,096	14,790	15,806
松戸分館	5,076	4,637	4,815
合 計	126,447	123,815	125,703

学生貸出冊数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本 館	96,806	95,182	94,628
亥鼻分館	13,282	13,027	13,812
松戸分館	4,840	4,413	4,480
合 計	114,928	112,622	112,920

学生 1 人あたりの貸出冊数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
千葉大学 (本分館合計 冊数／学生数)	7.9	7.9	7.9
国立大学全体	10.5	10.6	未集計
国立大学区分A	12.0	12.1	未集計

[区分 A は 8 学部以上の規模]

(参考) 本学の学生数の推移

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
学部・大学院合計	14,481	14,335	14,277

「大学構成調査票」による(聴講生等数を除く)

6.3.3. 文献複写・現物貸借件数

文献複写は依頼・受付ともに減少傾向であるが、看護学文献を所蔵している亥鼻分館では、他大学からの文献提供受付が依然として多い。現物貸借については、本館の改修の影響により、平成 25・26 年度は借受が多く、貸出が少ない。

6.3.3.1. 文献複写

文献複写 依頼	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本 館	2,441	2,479	1,777
亥鼻分館	2,518	2,059	2,123
松戸分館	225	263	130
合 計	5,184	4,801	4,030

文献複写 受付	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本 館	1,016	1,094	1,662
亥鼻分館	5,116	4,627	4,041
松戸分館	518	370	265
合 計	6,650	6,091	5,968

6.3.3.2. 現物貸借

現物貸借 借受	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本 館	1,018	1,002	837
亥鼻分館	99	67	95
松戸分館	37	85	55
合 計	1,154	1,154	987

現物貸借 貸出	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本 館	163	171	306
亥鼻分館	69	54	29
松戸分館	32	29	10
合 計	264	254	345

6.3.4. レファレンス件数

カウンターでの質問に応じるクイックレファレンスのほか、本館においては、N棟2階の学習スペースの中にレファレンス・デスクを設置し、平日午後の3時間、職員が常駐して対応している。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本 館	6,103	5,750	6,221
亥鼻分館	1,749	1,852	1,841
松戸分館	1,114	1,122	1,205
合 計	8,966	8,724	9,267

6.3.5. 情報リテラシー教育

※数値はいずれも附属図書館内調査

アカデミック・リンクの人的支援活動として、ガイダンス・情報リテラシー教育を積極的に行っており、参加人数が増加している。図書館主催で行う、新入生ライブラリツアー、各種データベース利用講習会のほか、各学部学科・グループ別講習会、普遍教育「情報処理」授業支援等の授業連携ガイダンスも実施している。また、対面のガイダンスだけではなく、データベース等のツールについて、情報の探し方や使い方を解説したインフォメーションシートの作成、配布も行っている。

開催回数

		平成25年度	平成26年度	平成27年度
本 館	総 数	113	101	106
	(内 授業連携)	(73)	(71)	(76)
亥鼻分館	総 数	30	18	26
	(内 授業連携)	(27)	(18)	(17)
松戸分館	総 数	4	2	6
	(内 授業連携)	(3)	(2)	(6)
合 計	総 数	147	121	138
	(内 授業連携)	(103)	(91)	(99)

参加人数

		平成25年度	平成26年度	平成27年度
本 館	総 数	4,218	4,431	4,509
	(内 授業連携)	(3,845)	(4,006)	(4,088)
亥鼻分館	総 数	713	608	675
	(内 授業連携)	(649)	(608)	(596)
松戸分館	総 数	369	320	422
	(内 授業連携)	(358)	(320)	(422)
合 計	総 数	5,300	5,359	5,606
	(内 授業連携)	(4,852)	(4,934)	(5,106)

上段はガイダンスの総数、下段(()書き)は授業連携ガイダンスの内数

授業連携ガイダンスは、各学部学科・グループ別講習会、普遍教育「情報処理」授業支援、図書館学関連授業に対する支援を含む

6.4. 留学生サービス

※蔵書、ガイダンス数値はいずれも附属図書館内調査

本学には平成 27 年度で 1,443 名の留学生を受け入れている。留学生コーナーに図書を配置するほか、留学生対象に日本語・英語両方でガイダンスを行っている。

留学生数内訳

学部生	修士	博士	研究生	特別研究生	特別聴講学生	科目等履修生	専攻生	予備教育生	合計
194	226	298	124	25	509	23	30	14	1,443

(大学概要 2016 に掲載の平成 27 年度外国人学生数)

留学生用コーナー蔵書冊数

	本館	亥鼻分館	松戸分館	合計
平成27年3月末	3,879	1,244	1,689	6,812

留学生ガイダンス

平成 25 年度

実施日	回数	使用言語	参加者数	内容
4月19日 本館	1	英語	2	図書館サービス案内, 館内見学ツアー
10月4日 本館	2	英語1, 日本語1	45	館内見学ツアー
10月11日 亥鼻分館	1	英語	1	文献検索演習, 文献管理法
10月24日 本館	1	日本語	10	蔵書検索, 日本語論文検索ほか

平成 26 年度

実施日	回数	使用言語	参加者数	内容
4月18日 本館	1	英語	7	図書館サービス案内, 館内見学ツアー
10月4日 本館	2	英語1, 日本語1	49	館内見学ツアー
10月10日 亥鼻分館	1	英語	1	文献検索演習, 文献管理法
10月23日 本館	1	日本語	24	蔵書検索, 日本語論文検索ほか

平成 27 年度

実施日	回数	使用言語	参加者数	内容
4月9日 本館	1	英語	7	図書館サービス案内, 館内見学ツアー
10月2日 本館	2	英語1, 日本語1	42	図書館サービス案内, 館内見学ツアー
10月22日 本館	1	日本語	21	蔵書検索, 日本語論文検索ほか

6.5. ウェブサービス

※数値はいずれも附属図書館内調査

6.5.1. 千葉大学蔵書検索(OPAC)・MyLibrary

OPAC (Online Public Access Catalog) では千葉大学附属図書館の蔵書検索に加え、図書の所蔵状況、貸出状況の確認ができる。また、図書館サービスをウェブ上で提供しているMyLibraryの機能では、自分自身の貸出・予約状況確認のほか、借用中の図書の更新手続き(返却期限延長)をオンラインで行うことができる。また、文献複写・現物貸借もオンラインで申し込みでき、申し込んだ文献複写や借用の進捗状況も確認可能である。

OPAC 利用状況

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
簡易検索回数	222,986	211,744	200,453
詳細検索回数	695,480	770,574	750,204
検索回数(再検索回数も含む)	1,046,697	1,137,164	1,171,143

簡易検索回数は、検索窓が1つだけの検索画面を利用した回数である。

詳細検索回数は、検索項目を複数組み合わせで検索できる検索画面を利用した回数である。初期画面は詳細検索画面に設定されている。

検索回数は、再検索の回数を含むため、簡易検索回数と詳細検索回数の合計とは一致しない。

MyLibrary 利用状況

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
貸出・予約状況照会	20,636	20,465	21,695
文献複写・貸借申し込み	9,404	9,032	8,160
文献複写・貸借申し込み状況照会	5,237	5,512	4,229
予約取り寄せ	5,461	5,489	5,535

6.5.2. @千葉大リンクサービス(リンクリゾルバ)

@千葉大リンクサービスは、ウェブ上で見つけた文献情報を入手するためのサービスであり、データベースによっては、千葉大のネットワーク内から検索した際に下記のアイコンが表示され、アイコンをクリックすると電子ジャーナル、蔵書検索などへつながり、ナビゲーションウィンドウが開く。このサービスの開始以前は、データベースの検索結果を参照して、改めて蔵書検索や電子ジャーナルのタイトルリストの検索等の手間が必要であったが、このサービスによってデータベースの検索結果から直接論文本文にアクセスしたり、MyLibrary にログインして申し込むことができる。



「@千葉大リンクサービス」アイコン

7. 情報発信・広報

7.1. ウェブによる広報

千葉大学附属図書館では、工学部電気電子工学研究科池田研究室の協力により千葉大学附属図書館情報検索システム(CULIS)を構築し、平成6年4月に全国立大学図書館に先駆けてウェブサイトを開設した。以来、メニューを整備しつつ、図書館の情報発信とサービスの提供を行ってきた。

平成24年4月からの千葉大学におけるアカデミック・リンクに関する本格的なサービス提供に伴い、アカデミック・リンク・センターと共働する附属図書館のウェブサイトについて視認性の向上を図るため、デザインをリニューアルし、「探す」「使う」「知る」の3つのカテゴリーで情報発信を行っている。

7.1.1. 附属図書館ウェブサイト

URL : <http://www.ll.chiba-u.jp/>



■平成26年度

本館の利用案内について、PDFファイルのリンクしかなかったものをHTML化し、アクセシビリティの向上をはかった。

■平成27年度

利用案内のページに本館の館内案内図(日・英)を掲載した。

紹介状発行申込フォームのファイルをダウンロード可能にし、来館せずに申込ができるようにするなど、サービスの充実を図った。

7.1.2. Twitter, facebook

※数値は附属図書館内調査

平成 23 年度から、アカデミック・リンク・センターと共通のアカウントを用いて、図書館のイベントやお知らせについて、ウェブサイトよりもさらに詳細な情報を提供したり、台風接近時の臨時休館など各種情報の周知を行っている。

		平成25年度	平成26年度	平成27年度
Twitter	ツイート数	351	799	778
Facebook	投稿数	318	294	292

7.2. 学術成果リポジトリ

千葉大学学術成果リポジトリ(CURATOR)は、千葉大学において生み出された学術研究成果(学術論文、プレプリント、テクニカルレポート、学位論文、会議発表資料等)を電子的に保存し学内外に公開するインターネット上の発信拠点である。

千葉大学は日本で初めて機関リポジトリを構築し、「千葉医学会誌」等の論文誌や「萩庭さく葉標本」の画像データ等、さまざまなコンテンツが登録されている。

学術成果リポジトリの整備状況

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
コンテンツ件数(累計)	89,157	90,043	90,606
アクセス回数(／月)	107,657	109,571	124,225

中期目標期間の実施状況経年データ(企画総務部企画政策課提出)による

■平成 25 年度

- ・学位規則の改正に伴い、博士論文の組織的な登録を開始(平成 25 年 4 月)
- ・国立情報学研究所(NII)の E-Repository 用の共用リポジトリ JAIRO Cloud 移行のためのデータ抽出プログラム開発に協力(平成 25 年 8 月～26 年 8 月)

■平成 26 年度

- ・国立情報学研究所(NII)の共用リポジトリ JAIRO Cloud 移行実験に参加
(報告書 <http://id.nii.ac.jp/1038/00000160/>)(平成 26 年 5～10 月)
- ・ジャパンリンクセンター(JaLC)の研究データへの DOI 登録実験プロジェクトへ参加
(平成 26 年 10 月～27 年 9 月)

■平成 27 年度

- ・次期リポジトリシステムの検討を開始(平成 27 年 5 月)
- ・「千葉大学オープンアクセス方針」を教育研究評議会で承認(平成 28 年 3 月)

(参考)

平成 14～16 年度(計画から構築まで)

- ・学術情報発信強化に向けてリポジトリシステムの構築を計画し、プロトタイプ・システムの開発(平成 14 年度)
- ・「千葉大学学術成果リポジトリ運用指針」制定(平成 17 年 2 月図書館運営委員会)
- ・教育研究評議会にて承認, 運用開始(平成 17 年 2 月)

平成 17～24 年度(正式公開から評価システム構築まで)

- ・「千葉大学学術成果リポジトリ(CURATOR)」を正式公開(平成 17 年 7 月)
- ・平成 17～24 年度に, 国立情報学研究所最先端学術情報基盤(CSI) 次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業 学術機関リポジトリ構築連携支援事業を受託し, 学内成果を電子化・公開やコミュニティの創出支援, 機関リポジトリアウトプット評価システムの構築に取り組んだ。
- ・CURATOR への取り組みにおいて平成 18 年度国立大学図書館協会賞を受賞(平成 18 年 3 月)
- ・学位論文の登録促進について, 大学院教育委員会で承認(平成 21 年 12 月)

7.3. 図書館職員による研究教育発表等

職員が図書館の活動やアカデミック・リンク・センターの活動で実践した内容については、積極的に論文・口頭発表を行い、本学の取り組みで得られた成果の共有・情報発信に努めている。また、国内の研修会等にも講師を派遣し、図書館界の人材育成にも貢献している。

7.3.1. 論文・口頭発表

表題	掲載・発表先情報	発表年	著者・発表者	備考
国際連携活動の実際とノウハウ：DRFの活動を通して	大学図書館研究 98, p.40-50	2013	内島秀樹, 杉田茂樹, 鈴木雅子, 西園由依, 土出郁子	千葉大所属: 杉田
「地域生活学研究」リニューアルへの祝辞	地域生活学研究 4, p.1-2	2013	杉田茂樹	
機関リポジトリ	大学図書館研究 100, p.29-37	2014	杉田茂樹	
平成25年度大学図書館シンポジウム「The University Library of the Future 大学図書館の未来」報告	大学図書館研究 100, p.104-109	2014	国公立大学図書館協力委員会 シンポジウム企画・運営委員会	千葉大所属: 竹内, 谷
電子化時代の大学教材(特集 電子化時代の資料アクセス)	図書館雑誌 108(10), p.680-681	2015	三角太郎	
大学学習資源コンソーシアム 学習・教育のための利用環境整備	情報管理 57(10), 725-733	2015	三角太郎	
PDA で変わる選書の未来：千葉大学・お茶の水女子大学・横浜国立大学三大学連携プロジェクトの取り組み	情報の科学と技術 65(9), p.379-385	2015	立石亜紀子, 餌取直子, 庄司三千子	千葉大所属: 庄司
オープン・アクセス思潮の近年の展開	知能と情報 27(3), p.84	2015	杉田茂樹	
Students' behavior in library-based learning commons: the results of focus group interviews at Chiba University	The 6th international conference on Asia-pacific Library and Information Education and Practice 2015/11. p.358-366	2015	Naho Tani, Mariko Takeuchi, Yoriko Ikejiri, Rie Marumo, and Michiko Shoji, [Librarians] Chihiro Kunimoto, Yuji Shirakawa and Hiroya Takeuchi	
大学図書館における多彩な空間利用	[千葉市図書館情報ネットワーク協議会]Network通信 No.45合併号, p.31-32	2015	中原由美子	
第86回日本医学図書館協会総会分科会B「究極のディスプレイ術を学ぶ」参加報告	医学図書館 62(4), p.257-260	2015	武内八重子	
学術情報流通の逆転(小特集 機関リポジトリのこれから)	大学図書館研究 103, p.1-8	2016	杉田茂樹	
北米の大学図書館におけるニーズ調査とシーズ提供の方策の調査	大学図書館研究 103, p.62-73	2016	谷奈穂, 嶋田晋	千葉大所属: 谷

7.3.2. 講師派遣

平成 25 年度

研修等名称(主催)	開催地	講師等担当者	日程
第5回中国・四国・九州・沖縄地区大学図書館職員フレッシュパーソンセミナー(国立大学図書館協会)	広島大学	杉田茂樹	平成25年9月12日
平成25年度大学図書館職員短期研修(京都大学附属図書館・東京大学附属図書館)	京都大学・東京大学	杉田茂樹	平成25年10月3日・11月7日
デジタルリポジトリ連合第10回全国ワークショップ	パシフィコ横浜	杉田茂樹	平成25年10月29日
平成25年度第2回JAIRO Cloud講習会(国立情報学研究所)	金城学院大学	武内八重子	平成25年11月27日
第5回 SPARC Japan セミナー平成25(国立情報学研究所)	国立情報学研究所	杉田茂樹	平成26年2月7日
平成25年度国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会事例報告	筑波大学東京キャンパス文京校舎	庄司三千子	平成26年2月12日
国立大学図書館協会東京地区協会大学図書館職員研修	お茶の水女子大学附属図書館	谷奈穂	平成26年2月19日

平成 26 年度

研修等名称	開催地	講師等担当者	日程
学術情報基盤オープンフォーラム2014(国立情報学研究所)	国立情報学研究所	杉田茂樹	平成26年5月29日
目録システム講習会(国立情報学研究所)	国立情報学研究所	木下 直	平成26年6月18日～20日
三大学連携 機関リポジトリ研修会	お茶の水女子大学	杉田茂樹・三角太郎・武内八重子・谷奈穂	平成26年8月5日
平成26年度大学図書館職員短期研修(京都大学附属図書館・東京大学附属図書館)	京都大学・東京大学	杉田茂樹	平成26年10月9日・11月13日
オープンアクセス・サミット2014(国立情報学研究所)	学術総合センター	三角太郎	平成26年10月22日
第100回全国図書館大会第5分科会大学図書館(日本図書館協会)	明治大学駿河台キャンパス	三角太郎	平成26年11月1日
第16回図書館総合展フォーラム 大学の知の発信システムの構築に向けて(機関リポジトリ推進委員会)	パシフィコ横浜	杉田茂樹・三角太郎	平成26年11月6日
静岡県大学図書館協議会講演会	静岡大学	杉田茂樹	平成26年12月5日
東海地区大学図書館協議会研修会	愛知県図書館	杉田茂樹	平成26年12月19日
France/Japan joint Meeting on Open Access(在日フランス大使館)	在日フランス大使館	三角太郎	平成27年1月28日
平成26年度国立大学図書館協会シンポジウム	名古屋大学附属図書館	谷奈穂	平成27年1月28日
平成26年度第5回JAIRO Cloud講習会(国立情報学研究所)	国立情報学研究所	武内八重子	平成27年2月2日
千葉市図書館情報ネットワーク協議会平成26年度第2回研修会	千葉大学附属図書館本館	中原由美子	平成27年2月6日
機関リポジトリ新任担当者研修(機関リポジトリ推進委員会)	東北学院大学・岡山大学	三角太郎・杉田茂樹	平成27年2月20日・27日
平成26年度JAIRO Cloud講習会(国立情報学研究所)	山形大学小白川図書館	三角太郎	平成27年3月6日
科学情報学研究会(2014年度名古屋大学地球環境研究所・研究集会)	東京理科大学森戸記念館	三角太郎	平成27年3月25日

平成 27 年度

研修等名称	開催地	講師等担当者	日程
学術情報基盤オープンフォーラム2015(国立情報学研究所)	国立情報学研究所	杉田茂樹・三角太郎	平成27年6月11日～12日
第62回国立大学図書館協会総会海外派遣事業参加報告	ホテルニューオータニ熊本	谷奈穂	平成27年6月18日
ジャパンリンクセンター 研究データへのDOI登録実験プロジェクト中間報告会 (JaLC: Japan Link Center)	科学技術振興機構 東京本部 別館	三角太郎	平成27年7月3日
機関リポジトリ新任担当者研修(国立情報学研究所)	大同大学・国立情報学研究所	杉田茂樹・塩田知也	平成27年7月23日・10月1日
第11回学術情報ソリューションセミナー2015 (九州大学附属図書館・株式会社サンメディア)	九州大学附属図書館	三角太郎	平成27年7月31日
平成27年度大学図書館職員短期研修(京都大学附属図書館・東京大学附属図書館)	京都大学・国立情報学研究所	杉田茂樹	平成27年10月8日・12月3日
CODATAジャパン・データサイテーション・ワークショップ(科学技術データ委員会)	国立情報学研究所	三角太郎	平成27年10月29日
第17回 図書館総合展フォーラム 機関リポジトリの近未来:オープンアクセスからオープンサイエンスへ(機関リポジトリ推進委員会)	パシフィコ横浜	杉田茂樹・三角太郎	平成27年11月11日
平成27年度JUSTICE総会報告(大学図書館コンソーシアム連合)	明治大学駿河台キャンパスグローバルフロント	庄司三千子	平成28年3月2日
研究データとオープンサイエンスフォーラム(国立国会図書館)	国立国会図書館	三角太郎	平成28年3月17日

8. アカデミック・リンク・プロジェクト

アカデミック・リンクの概念に基づく新しい学習環境を提供するため、平成 24 年度に引き続き、平成 25 年度から 26 年度は 7 つのプロジェクトを実施した。各プロジェクトの企画、運営、分析など様々な段階でアカデミック・リンク・センターの教員と図書館職員が協働している。平成 27 年度からはプロジェクトを大きく 3 つのグループに再編し、引き続き教員と職員が協働してプロジェクトを実施している。以下は、平成 27 年度のプロジェクトの区分に従って 3 年分を記述する（各プロジェクトの詳細については、「アカデミック・リンク・センター評価委員会報告書」を参照のこと。）

8.1. コンテンツ形成（旧コンテンツ・ラボ）

8.1.1. 授業資料ナビゲータ

「授業資料ナビゲータ」とは、普遍教育の教養コア科目・教養展開科目などで、授業を担当する教員と図書館職員が、その授業の内容にあわせて共同作成した参考文献やウェブ情報のリスト（パスファインダー）であり、紙での配布とウェブ上での公開を行っている。「授業資料ナビゲータ」に掲載された図書は、本館 N 棟 2 階ブックツリーの授業資料ナビコーナーに「貸出可」と「館内利用」の 2 冊を用意している。このコーナーの棚は、RFID が設置された棚となっており、資料の取り出し状況を計測することができ、継続的に調査を行っている。

8.1.2. 動画の収録・配信（授業、セミナー等）

平成 24 年度の試行を経て、平成 25 年度から平成 27 年度の期間に本格的に実施した。内容としては、授業そのものを収録した授業動画、授業担当教員による授業紹介のためのショート動画である授業紹介動画、授業で出題した演習の解説や授業で扱わない応用的な内容に関する説明を収録した授業解説動画、1210 あかりんアワー講演動画、アカデミック・リンク・セミナーやシンポジウムの講演動画である。アカデミック・リンク・セミナーとシンポジウムの動画はアカデミック・リンク・センターのウェブサイトにおいて公開されている。

8.1.3. 全学及び各部局 FD の e ラーニング化

千葉大学における FD(Faculty Development)活動は、現在は高等教育研究機構 FD 推進部内で、企画立案が行われており、FD 推進部内と連携し、収録などの協力を行っている。

8.1.4. ALSA-TT の運営

ALSA-TT(Academic Link Student Assistant-Technical Team)は、本学の SA(Student Assistant)制度を元に、アカデミック・リンク・センターが雇用・運営する学生スタッフ組織のことである。ALSA-TT は、技術支援体制構築のために組織される。メンバーの多くは、動画収録の経験がある者又は習得に興味がある者であり、PC に詳しい学生も多数在籍している。業務としては、学生による技術支援である PC サポートデスク、貸出用端末のセットアップやメンテナン

ス、動画収録を担当している。

8.1.5. 物理演習問題集の電子化

多様な形態での教材の提供を目的として、物理演習問題の電子化及び Moodle による提供を行っている。「力学」「電磁気学」「数学基礎(物理数学)」を中心に進めている。

8.1.6. 基盤整備／Moodle

千葉大学では全学で利用する Learning Management System(LMS)としてオープンソースソフトウェアの Moodle を採用し、授業時間以外も含めた学習活動の支援を行っている。対面授業に加えての LMS の導入は、授業外学習の促進において不可欠となりつつある。Moodle のサポートでは、主に電子メールでの相談対応を行っているが、それ以外にも、アカデミック・リンク・センター1 棟 2 階にある「コンテンツ制作室」にて対面での相談対応を行っている他、マニュアルの作成も行っている。

8.1.7. コンテンツ制作室・PC サポートデスクの運営

アカデミック・リンク・センター1 棟のコンテンツ制作室は、教材の作成、課題の作成、課外活動等にあたって動画や画像などマルチメディアコンテンツの制作に適した環境・機材が整備されている。PC サポートデスクは教育用端末が並ぶ N 棟 3 階のグループワークエリアの一角で、コンピュータの利用に関する技術支援を目的として開設している。8.1.4.で前述のとおり、ALSA-TT が相談を受けている。

8.1.8. 児童文学事典の電子的再生(平成 25 年度で終了)

旧プロジェクト区分であった「レガシーコンテンツ再生」の一つの事例として『児童文学事典』(日本児童文学学会編, 1988 年, 東京書籍)の電子的な再生を行った。初版から 20 年余り経過していることもあり、本事典の電子化とあわせ改訂作業も進めた。その準備のために、出版社である東京書籍と日本児童文学学会の間で、本事典の電子化について覚書を取り交わし、学会側の判断で電子化を進めることが可能となる合意を得ている。完成したものを平成 26 年 1 月に『児童文学事典』電子版のページ(<http://alc.chiba-u.jp/cl>)で公開した。

8.1.9. デジタルコースパックのための著作権処理

著作権処理の事例蓄積を目的として、LMS を通じた授業外学習教材の提供のための使用許諾取得を行っている。著作権処理にあたって、以下のような作業上の問題点が明らかとなった。第一に、学会・出版社によって権利者が著者と学会・出版社の間で不分明であり、許諾申請者(この場合千葉大学)の問い合わせに対して明確な対処をできないことがあること。第二に、権利の所在が明らかになっている場合であっても、許諾が得られることが期待されるにもかかわらず実際には不可能であることがあること。第三に、一つの授業あたりの、上記のような使用許諾申請の作業量が非常に大きなものとなること、の 3 点である。あわせて「教材共有環境

の構築」についても検討したが、これらのプロジェクトについては、平成 26 年 5 月に設立された電子情報環境下における著作物の利用環境整備を検討する「大学学習資源コンソーシアム」に移行された。

8.1.10. デジタルコースパックの POD による提供の実験的試行(平成 26 年 6 月で終了)

電子化された授業教材は、パーソナルコンピュータやタブレット端末を通してアクセスできるが、一方で、紙媒体での教材も、一覧性の優位さや書き込みが容易等の長所があり、一定数の需要が想定される。多様な形態での教材提供というコンセプトのもと、POD (Print on Demand) システムを導入し、電子化された教材を紙媒体で提供する実験的な試行を実施した。

8.2. 人的支援(旧ティーチング・ハブ)

8.2.1. ALSA-LS による分野別学習相談

学習相談を中心とする学習支援を担当する Student Assistant を、ALSA-LS (Learning Support) と称している。学生の自律的学習者としての成長を促すアカデミック・リンクの諸プロジェクトの一環であり、さらにコンテンツの利用やささまざまな学習支援の選択肢と組み合わせることにより、学習環境のさらなる充実を期して行われるものである。

ALSA-LS による学習相談の基本方針は下記のとおりである。

- (1) 教室や学習室などの個室ではなく図書館施設内のオープンな場所で行う
 - (2) 自然科学分野の数学・物理・化学と文系分野の「レポートの書き方」の4分野を置く
 - (3) 各分野を専門とする大学院生が ALSA-LS として学習相談を受ける
 - (4) 学生相談室等との協力体制を整備し、学習相談を超えた学生支援を可能とする
 - (5) 学習相談の記録用紙、利用者アンケート、業務日誌等を整備して情報を蓄積することでシステムの改善を図る
 - (6) ALSA-LS は事前研修・事後研修(振り返り)に参加し、支援者としての気づきやシステムの課題と改善を全体で共有する
- を基本的な実施方針として取り組むこととした。これらのうち(5)と(6)は、ALSA-LS が学習相談を受けて質問に対応する受動的な存在ではなく、相談者の学習過程を共有する支援者であり、そのことを通じて自分自身の成長とシステムの運営と改善にも参加する役割をもつ自律的な存在と位置づけたために実施したことである。これらの PDCA サイクルによって、絶えず課題の明確化と改善を行うことを可能としている。

8.2.2. ALSA-LS によるセミナー企画

レポート作成セミナーにおいては、ALSA-LS により構成・作成・講演が行われるほか、ALSA-LS 自身による相互評価・構成の改訂や新規企画の提案・作成等の改善が行われている。

8.2.3. 1210 あかりんアワー

平成 24 年 4 月より、「1210 あかりんアワー」(以下、あかりんアワー)を実施している。あかりんアワーは、千葉大学の学生と教職員の距離を縮めることを目的に実施しているショートセミナーである。12 時 10 分から 40 分までの 30 分間を利用して開催している。この名称は、開始時間とアカデミック・リンク・センターのマスコットキャラクターである「あかりん」に由来する。

火曜日は「教員が研究の楽しさを語る」を開催し、金曜日は様々なシリーズを開催している。今までに開催したシリーズとしては、「外国に暮らす」、「ALSA カフェ」、「千葉大学で〇〇するには？」などのシリーズがあるほか、他機関からの講師を招くなどの単体での企画を毎週行っている。「教員が研究の楽しさを語る」では、登壇者に紹介する図書・資料を 3～5 点ほど推薦してもらい、資料の推薦文をあわせて掲載したブックガイド(A4 サイズ1枚)を作成して参加者に配布している。さらに、推薦された資料とブックガイドは、附属図書館 N 棟 3 階ブックツリーに専用コーナーを設け、(平成 26 年 10 月からは L 棟 2 階ブックハウスにコーナーの場所を移動して)展示している。

8.2.4. 情報リテラシースキル養成活動

情報リテラシースキル養成活動は、必要な情報を収集し使いこなす技術の獲得を支援する活動である。これらの養成活動の開催方法や内容は多岐に渡り、図書館主催ガイダンスである館内ツアー、利用案内、各種データベース講習会などがあるほか、教員からの申込による学部学科グループ別ガイダンス、普遍教育「情報処理」授業支援、図書館学関連授業支援などを実施した。また大学院生(ALSA-LS)と図書館職員が協同でレポート作成セミナーを複数回実施した。

8.2.5. アクティブ・ラーニング・スペースにおける学習支援活動(レファレンス・デスク、オフィスアワー@AL)

教員によるオフィスアワー@AL、大学院生(ALSA-LS)による学習支援デスク、図書館職員によるレファレンス・デスクの 3 つを N 棟 2 階に設置して実践することにより、教員、学生、図書館職員が協働して学生の学習をサポートする取り組みを平成 24 年度の開設以来、継続的に行っている。

8.2.6. ALSA-GS によるアカデミック・リンク及び附属図書館の各種業務支援

本館でのアカデミック・リンク及び附属図書館の各種活動の支援を担当する Student Assistant として、ALSA-GS(General Support)を公募し、各種ガイダンス等の業務支援、企画、附属図書館本館内での図書館業務の補助・支援等の業務を行っている。

8.3. 空間整備・評価(旧アクティブ・ラーニング・スペース)

8.3.1. 千葉大学学習状況・情報利用環境調査(平成 23 年度～平成 27 年度実施)

アカデミック・リンクおよび千葉大学の学習環境を整備するために、千葉大学学部学生の日常的な学習環境・学習行動・生活時間・情報利用に関する基礎データを得ることを目的とするものである。そのデータを用いて、千葉大学内および学生生活全般において、アカデミック・リンクのもつ意味や位置づけを相対的・継続的に検証する。調査は、アカデミック・リンク・センター設置後、継続的に定点観測調査として実施する計画である。計画に沿って、平成 23 年度以降、毎年調査を実施している。

8.3.2. ID を共通記号化したうえでの各種調査の結果と学生成績情報の連動分析

毎年度定点観測的に実施している「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」の内容と、学生の成績情報とを接合し、分析することにより、アカデミック・リンクの各種取組が学生の「学習」に及ぼした影響(アウトカム)の測定および経年変化の補足を目的として、実施した。平成 27 年度からは高等教育研究機構と共同で実施している。

8.3.3. 調査結果の実務への還元

研究成果を実際の「サービス改善」に活かす試みとして、平成 27 年度には、非常勤職員を含む図書館職員全員を対象に「ワークショップ:アカデミック・リンクの取組みから千葉大生について知る」を教員と職員で共同開催した。当該ワークショップでは、平成 24 年度～平成 26 年度までに実施した種々の活動について振り返ったうえで、そこから見えてくる千葉大生の学習実態やニーズについて情報を共有し、学生支援のために「図書館としてこれから何ができるか?」というテーマで議論・提案を試みた。提案内容の一部については図書館サービスとして実施した。

8.3.4. 分館におけるアクティブ・ラーニング支援環境の整備

アカデミック・リンクの全学への敷衍を目指し、亥鼻分館、松戸分館においてもアクティブ・ラーニング・スペースを設置した。(詳細は、11.2.亥鼻分館、11.3.松戸分館参照)

8.3.5. ブックハウスのコンセプト確立・整備

ブックハウスは、附属図書館本館 L 棟の改修に伴い設けられた空間である。平成 26 年 10 月の L 棟リニューアルオープン以後、アカデミック・リンク・センターで開催しているショートセミナー「1210 あかりんアワー」や「授業資料ナビゲータ」で紹介された図書等、本学教員について知るきっかけとなる資料を配置してきたが、明確な運用方針は定められていなかった。平成 27 年度にあらためて検討を行い、現状をさらに発展させる方向で、教員の教育・研究や千葉大学に関する情報を広く発信し、関連するコンテンツを提供することで学生と教員・大学を結びつける、という点をコンセプトとすると定め、順次整備を行っている。

8.3.6. 定点カメラ映像など画像処理による利用状況・行動調査

本館N棟2階フロアにおける学生の利用状況を、学生達の通常の学習行動を阻害せず、可能な限り自然な状態で量的に「定点観測」することを目的に、①機の配置とその種類、②着席者の位置、③着席者の人数、④調査日時の4項目を収集する調査を平成24年度から25年度に実施した。

8.3.7. 学生に対するフォーカス・グループ・インタビュー調査

学習空間(アクティブ・ラーニング・スペース等)の評価を目的として、図書館改築前後(新旧)の学習環境を知る学部学生22名(2年生以上)を対象に実施したグループ・インタビュー調査である。その結果から、学生の行う学習行動を12通りに分類し、学習行動を誘発する「環境の要素」を3種類導き出した。さらに、行動と環境の関連性を分析し、学生の行動の幅を制限しない空間設計や設備のポイントを何点か明らかにした。さらに調査結果からは、学生の学習行動が、他の学生の様子や、学生自身が「環境に抱くイメージ」によって影響されることも示唆された。本調査については、その分析の途中経過を平成25年6月、大学教育学会において発表した。平成26年度後半から平成27年度前半にかけては、その最終的な結果を論文化し、学術論文『図書館における学生の行動とその行動に関係する環境の要素: フォーカス・グループ・インタビューによる探索的調査』としてまとめた(誌面掲載は平成28年度)。

8.3.8. 学生撮影写真及び個人インタビューの併用によるフォトボイス調査

平成25年度に、整備した学習空間と学生の学習行動の関連性をより詳細に探ることを目的に、学年も専攻も多様な学部学生9名を対象に実施したフォト・インタビュー調査である。調査では、学生自身が撮影した「学習風景の写真」と「個人インタビュー」から、図書館内外での学習行動、空間や情報源の使い方、学習行動の動機などを問い、本調査を実施した。平成26年度から平成27年度にかけては、データ分析を行った。その結果、学生の学習内容は、課題や試験対策など、授業で課せられた(受動的な動機による)学習に留まらず、授業を基にした発展的な学習や進路を見据えた学習等、個々人の興味や関心を動機とした(より能動的な動機による)学習にまで、その内容が幅広く及ぶことが明らかとなった。また、学習空間の使い方や利用される情報源にも多様性が見られた。

8.3.9. ブックトラックを用いた図書利用状況調査

本館N棟2階および3階で館内資料(図書や雑誌)がこれらのエリアでどのように利用されたかのデータは、学生の資料の利用状況やラーニング・コモンズでの学習行動の分析において、必須の基礎データとなる。一般に、館内資料の利用分析は貸出統計をベースに行われているものの、どこでどのような館内資料が利用されたかは貸出統計からは把握することができない。そこで平成24年度から25年度にかけて、館内で利用された資料の返却用のブックトラックをN棟2階および3階に設置し、返却された館内資料を記録することで、館内資料がこれらのエリアでどのように利用されているかを明らかにした。

8.3.10. ビーコンを用いた図書館における学生行動軌跡調査

Bluetoothを用いた屋内測位システムの一つであるiBeaconとiPhoneを用いて、図書館内での学生の行動軌跡を明らかにすることを目的とした調査であり、平成27年度に実施した。ビーコンは本館の建物内約290箇所に設置した。iPhoneを持った学生が、専用アプリケーションを起動して、建物内に配置されている「ビーコン＝発信機」に近づくと、自動的に位置情報を記録する。収集したデータを館内マップ上で可視化したり、同時に実施したアンケートから得た属性別に分析するなどし、空間向上に資するレポート化を進めている。

8.4. 広報・成果普及

8.4.1. アカデミック・リンク・セミナー

セミナーの開催は、本プロジェクトの中心に位置づけられるものである。アカデミック・リンク・センターが千葉大学全学に対して、教育・学習の情報化に関する研修機会を提供するとともに、本センターの活動成果を広く社会全体に発信することを目的とする。平成27年11月からは、「アカデミック・リンク・セミナー／ALPSセミナー」として開催されている。アカデミック・リンク・セミナー以外にも、図書館関係の全国的フォーラム等に参加し、報告等も行っている。

8.5. ALPS(アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成)プログラム

アカデミック・リンク・センターは、平成27年7月に文部科学大臣から教育関係共同利用拠点「教職員の組織的な研修等の共同利用拠点(教育・学修支援専門職養成)」の認定を受け、教育・学修支援専門職養成を進めるために、ALPSプログラム(Academic Link Professional Staff Development Program for Educational and Learning Support)をスタートさせた。拠点認定に伴い、新たに「教育・学修支援専門職養成部門」を設置するとともに、同部門の運営及び活動に関する重要事項を調査審議する運営委員会を設置した。平成27年度の事業としては、「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリック(試案)」を開発し、そのための基礎調査として文献調査、インタビュー調査、アンケート調査、訪問調査等を実施した。またキックオフシンポジウムと3回のセミナーを開催し、「ALPSブックレットシリーズ Vol.1」を発行配布し、大学における教育支援と学修支援の先駆的な取組や課題を幅広く紹介した。

9. 地域・社会連携

※数値はいずれも附属図書館内調査

9.1. 市民への公開

調査・研究等のために千葉大学附属図書館に所蔵する資料の利用希望者を対象に、各館のカウンターで氏名及び住所を確認して、公開している。入館者数にはオープン・キャンパス等の見学者数も含んでいる。なお、分館においては貸出は卒業生に限定している。

9.1.1. 入館者数

		平成25年度	平成26年度	平成27年度
登録者数	本館	995	880	863
	亥鼻分館	572	468	329
	松戸分館	19	2	3
	合計	1,586	1,350	1,195
入館者数	本館	27,033	22,580	24,043
	亥鼻分館	2,860	2,304	2,144
	松戸分館	311	211	180
	合計	30,204	25,095	26,367

9.1.2. 貸出冊数

		平成25年度	平成26年度	平成27年度
貸出冊数	本館	1,808	1,748	1,677
	亥鼻分館	41	48	51
	松戸分館	7	5	6
	合計	1,856	1,801	1,734

9.2. 高大連携

千葉大学では平成13年度から、千葉県内の高等学校と連携教育協定を締結し、本学で開講する授業の受講を認めている。附属図書館においても、本協定に基づく受講者を対象として図書館利用者カードを発行し、利用および図書の貸出を認めている。

開講年度	発行枚数
平成25年度	170
平成26年度	73
平成27年度	58

9.3. 千葉県内図書館との連携

9.3.1. 千葉県立図書館との相互協力件数

平成 22 年 7 月 1 日、「千葉県立図書館と千葉大学附属図書館との相互協力に関する協定」を締結し、千葉県立図書館 3 館と千葉大学附属図書館 3 館の間で県立図書館の搬送車による相互利用サービスを実施している。

分野を問わず、有効に利用されている。

	千葉県立図書館への貸出冊数			千葉県立図書館からの借用冊数		
	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
本館	27	17	41	212	280	223
亥鼻分館	40	26	6	15	17	32
松戸分館	16	5	0	21	46	28
合計	83	48	47	248	343	283

9.3.2. 千葉県大学図書館協議会

昭和 47 年 11 月全国図書館大会(日本図書館協会主催)が千葉県で開催されたことが発端である。昭和 59 年 11 月 20 日 第 19 回 千葉大学における開催から名称を「千葉県大学図書館協議会」と改めることとなった。毎年 1 回当番校において講演等を伴って会議を開催し、相互に連絡・協力することで互いの発展を図っている。

9.3.3. 千葉市図書館協議会

千葉市図書館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、図書館の行う図書館奉仕につき、館長に対して意見を述べることを趣旨として、昭和 47 年に設置された。千葉市図書館からの委嘱を受け委員を派遣。平成 24 年から副委員長を務める。

9.3.4. 千葉市図書館情報ネットワーク協議会

千葉市内の各種図書館の相互協力を通じて、情報提供能力を強固にし、図書館サービスの向上を図ると共に、学術研究及び生涯学習の発展に寄与することを目的とし、平成 6 年 1 月設立。毎年度、千葉市生涯学習センターその他で開催される「加盟館紹介展」への出展や研修等に協力している。

9.3.5. アジア経済研究所図書館

平成 26 年 10 月 10 日、「国立大学法人千葉大学附属図書館及び独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館の相互利用に関する覚書」を締結し、お互いの図書館をより便利に利用できるようにするとともに、年 1 回程度研究者にあかりんアワーへの登壇を依頼している。

アジア経済研究所図書館利用者カード申請書発行枚数

	発行枚数
平成26年度	13
平成27年度	23

10. 他機関図書館との連携

10.1. 国立大学図書館協会

国立大学図書館協会は、全国の国立大学、放送大学の附属図書館、及び4大学共同利用機関の図書館施設の、計 91(平成 27 年度現在)の大学・機関の図書館を会員とする組織で、会員間の緊密な連携と協力により、図書館機能の向上を支援するとともに、広く学術情報資源の相互利用の推進、学術情報流通基盤の発展に貢献し、もって大学の使命達成に寄与することを目的としている。協会は、国立大学図書館の機能向上に関し必要な調査研究、学術情報資源の共同整備と相互利用の促進、国立大学図書館職員の資質向上のための事業、及び学術情報流通に関する国内外の団体との連携・協力等の事業を行っている。

千葉大学附属図書館は、平成 27 年度に国立大学図書館協会の関東甲信越地区理事館を務め、以下の委員会に委員を派遣した。

- ・人材委員会人材育成小委員会(平成 25 年度)
- ・教育学習支援検討特別委員会(平成 25～27 年度)
- ・総務委員会ビジョン策定小委員会(平成 27 年度)

10.1.1. 国公立大学図書館協力委員会専門委員会への委員の派遣

国公立大学図書館協力委員会は、国立大学図書館協会、私立大学図書館協会、公立大学協会図書館協議会からなり、日本の大学図書館全体としての事業展開、課題解決、情報共有を行っている。

平成 25～27 年度には、千葉大学から、国公立大学図書館協力委員会の以下に掲げる 3 つの専門委員会に、国立大学図書館協会からの指名で 3 名の委員を派遣して、国公立大学附属図書館の様々な活動に貢献している。

- ・大学図書館シンポジウム企画・運営委員会
- ・大学図書館協力ニュース編集委員会
- ・大学図書館研究編集委員会

10.2. 千葉大学, お茶の水女子大学, 横浜国立大学における図書館連携(三大学連携)

各大学の附属図書館の教育・研究支援機能の充実及び高度化に向け, 単独大学では不可能な課題解決手法の開発・実施に取り組むことを目的に, 平成 26 年 3 月 25 日, 「千葉大学, お茶の水女子大学, 横浜国立大学における図書館連携に関する申合せ」を締結し, その目的を達成するため三大学図書館間連携作業部会を設置した。部会は, 次の各号に掲げる事項を検討している。

- (1) アクティブ・ラーニング支援機能に関する事例共有及び手法開発に関すること。
- (2) オープンアクセスに関する事例共有及び手法開発に関すること。
- (3) 電子資料の効率的な共同導入に関すること。
- (4) 紙媒体資料の効率的な共同保存(シェアード・プリント)に関すること。
- (5) 今後の効率的な図書館システムの在り方に関すること。
- (6) 本取組を通じた, 各大学の附属図書館における人材の育成及び職能開発に関すること。
- (7) その他申合せの1に規定する目的に合致した事項に関する調査, 立案及び実施に関すること。

(3)については, 丸善株式会社を取りまとめ役として平成 27 年 4 月から Patron-Driven Acquisition 方式による電子ブックの有償トライアルを実施した。この方式の導入は, 国内では初めての事例であったため, その結果を雑誌論文や JUSTICE 総会において報告した。

10.3. 大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議

国公立大学図書館協力委員会と国立情報学研究所は、我が国の大学等の教育研究機関において不可欠な学術情報の確保と発信の一層の強化を図ることを目的として「大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立情報学研究所と国公立大学図書館協力委員会との間における連携・協力の推進に関する協定書（以下、『協定書』）」を締結した。

大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議は、『協定書』のもとに設置され、本目的を達成されるために、以下の事項について連携・協力を推進している。

- (1) バックファイルを含む電子ジャーナル等の確保と恒久的なアクセス保証体制の整備
- (2) 機関リポジトリを通じた大学の知の発信システムの構築
- (3) 電子情報資源を含む総合目録データベースの強化
- (4) 学術情報の確保と発信に関する人材の交流と育成
- (5) 学術情報の確保と発信に関する国際連携の推進
- (6) その他本目的を達成しうるために必要な事項

更に、下部委員会として、以下の委員会を設置している。

- ・大学図書館コンソーシアム連合運営委員会
- ・機関リポジトリ推進委員会
- ・これからの学術情報システム構築検討委員会

10.3.1. 大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE: Japan Alliance of University Library Consortia for E-Resources）

大学図書館コンソーシアム連合は、日本の大学における教育・研究活動に必須である電子ジャーナルをはじめとした学術情報を、安定的・継続的に確保して提供するための活動を推進している。国立大学図書館協会コンソーシアムと国公立大学図書館コンソーシアムとのアライアンスによる新たなコンソーシアムとして、平成 23 年度に誕生した。

『協定書』の趣旨に沿って、「バックファイルを含む電子ジャーナル等の確保と恒久的なアクセス保証体制の整備」を推進することを主要な目的としている。

千葉大学附属図書館も設立当初から参加館となっており、作業部会に委員を派遣している。

10.3.2. 機関リポジトリ推進委員会

機関リポジトリ推進委員会は、『協定書』に掲げられた「機関リポジトリを通じた大学の知の発信システムの構築」に関する事項を企画・立案し、学術情報の円滑な流通及び発信力の強化にかかる活動を推進することを目的とし、平成 25 年度に設置された。

千葉大学附属図書館は設置当初から委員を派遣するほか、ワーキングに協力員を派遣し、活動に参画している。

10.3.3. これからの学術情報システム構築検討委員会

これからの学術情報システム構築検討委員会は、『協定書』に掲げられた「電子情報資源を含む総合目録データベースの強化」に関する事項を企画・立案し、学術情報資源の基盤構築、管理、共有および提供にかかる活動を推進することを目的として平成 24 年度に設置された。

千葉大学附属図書館からは作業部会に委員を派遣している。

10.4. その他

10.4.1. デジタルリポジトリ連合 (DRF: Digital Repository Federation)

デジタルリポジトリ連合は、メーリングリストやウェブサイト、集合イベントなどでの情報共有、意見交換を通じ、国内における機関リポジトリの発展とオープンアクセス思潮の興隆につとめている。

千葉大学附属図書館は、DRF 設立当初から深く関わり、運営委員会やワーキンググループにメンバーを派遣し、その活動に関する協力体制を維持している。

10.4.2. ジャパンリンクセンター (JaLC: Japan Link Center)

ジャパンリンクセンターは平成 24 年に国際 DOI (Digital Object Identifier) 財団から認定された DOI 登録機関である。国内の各機関が保有する電子的学術コンテンツの書誌・所在情報を一元的に管理し、DOI を登録するシステムを科学技術振興機構、物質・材料研究機構、国立情報学研究所、国立国会図書館の 4 機関が共同で運営している。

千葉大学附属図書館は、平成 26 年 9 月～27 年 12 月に実施された「研究データへの DOI 登録実験プロジェクト」に参加した。

10.付表

学外委員

委員会名称	氏名	委嘱期間
人材委員会(国立大学図書館協会)	島文子	平成23年4月1日～平成26年3月31日
教育学習支援特別委員会(国立大学図書館協会)	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成28年3月31日
大学図書館シンポジウム企画・運営委員会(国公立大学図書館協力委員会)	島文子	平成23年4月1日～平成26年3月31日
大学図書館シンポジウム企画・運営委員会(国公立大学図書館協力委員会)	杉田茂樹	平成26年4月1日～平成28年3月31日
大学図書館協カニュース編集委員会(国公立大学図書館協力委員会)	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成26年3月31日
大学図書館協カニュース編集委員会(国公立大学図書館協力委員会)	大山努	平成26年4月1日～平成28年3月31日
大学図書館研究編集委員(国公立大学図書館協力委員会)	竹内茉莉子	平成25年4月1日～平成26年3月31日
大学図書館研究編集委員(国公立大学図書館協力委員会)	佐野悠	平成26年4月1日～平成27年3月31日
大学図書館研究編集委員(国公立大学図書館協力委員会)	伊勢幸恵	平成27年4月1日～
大学図書館コンソーシアム連合作業部会	三角太郎	平成26年4月1日～平成27年7月31日 平成28年4月1日～
大学図書館コンソーシアム連合作業部会	池尻亮子	平成27年7月1日～
機関リポジトリ推進委員会	杉田茂樹	平成25年8月1日～平成28年3月31日
機関リポジトリ推進委員会ワーキンググループ	三角太郎	平成26年7月22日～
機関リポジトリ推進委員会ワーキンググループ	中原由美子	平成26年7月22日～平成27年3月31日
これからの学術情報システム構築検討委員会 NACSIS-CAT検討作業部会	三角太郎	平成27年7月15日～
目録委員会(日本図書館協会)	木下 直	平成27年4月1日～平成28年3月31日
千葉市図書館協議会副委員長	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成26年3月31日
千葉市図書館協議会副委員長	大山努	平成26年4月1日～平成28年3月31日
千葉市図書館情報ネットワーク協議会理事	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成26年3月31日
千葉市図書館情報ネットワーク協議会理事	大山努	平成26年4月1日～平成28年3月31日
デジタルリポジトリ連合運営委員会	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成28年3月31日
デジタルリポジトリ連合企画ワーキング委員	武内八重子	平成25年4月1日～平成27年3月31日
デジタルリポジトリ連合企画ワーキング委員	三角太郎	平成26年5月23日～平成27年3月31日
デジタルリポジトリ連合企画ワーキング委員	塩田知也	平成27年5月14日～平成28年3月31日
COAR Repository Content Working Group	杉田茂樹	平成25年4月1日～平成28年3月31日

11. 各館特記

※数値はいずれも附属図書館内調査

11.1. 本館

11.1.1. L 棟改修

平成 26 年 10 月に、前年度後半から改修工事を行っていた L 棟がリニューアルオープンした。これにより、既に整備されていた 3 つの建物とあわせて、西千葉キャンパスにおける「場所としての図書館」の設備が整った。4 つの建物は下記のとおり、それぞれ異なるコンセプト・役割を持ち相互に補完しながら附属図書館/アカデミック・リンク・センターの活動の場を構成している。

- ・L 棟 (Learning) : 黙考する図書館
- ・I 棟 (Investigation) : 研究・発信する図書館
- ・N 棟 (Networking) : 対話する図書館
- ・K 棟 (Knowledge) : 知識が眠る図書館

L 棟は、「黙考する図書館」というコンセプトにもとづき、一人静かに資料を読み込んだり、思考する空間と位置付けられており、そのため一般書を中心とする資料とともに多くの閲覧席が設置されている。閲覧席エリアは会話禁止であり、隣接する書庫としての役割を重視した K 棟とともに伝統的な図書館機能を提供している。その上で、多様な利用形態へ対応するため、下記の特徴的な施設を有している。

- ・静寂閲覧室 (2～4 階) : 通常の閲覧席とはガラス壁で仕切られている。防音性の高いガラスにより、周囲の音は遮断し、かつ室外との視認性は確保している。室内では会話が禁じられ、電卓やキーボード等の音の出る機器の利用も禁止となっている。
- ・ブックハウス (2 階) : 授業や教員に関する情報を集約する空間。N 棟プレゼンテーションスペースで実施しているショートセミナー「1210 あかりんアワー」の教員企画関連資料や授業ごとに関連情報をまとめた「授業資料ナビゲータ」に記された図書、教員寄贈著書等を配架した。80 インチの大型ディスプレイを設置し、千葉大学や附属図書館/アカデミック・リンク・センターに関する情報を発信している。平成 28 年度以降、教員や研究・教育に関する情報の集約・発信を強化する予定である。
- ・コミュニケーションエリア (2 階) : L 棟は静寂な空間を基本とするが、N 棟のコミュニケーションエリアから連続する場所に同様の機能を持たせ、利用の高かったアクティブ・ラーニング・エリアの拡充を図った。
- ・ラウンジ (1 階) : カフェ風の机・椅子やソファ等を配したカジュアルな空間。生協ブックセンターとガラス壁を隔てて接しているため、双方の様子を見ることができる。ともに本を扱う図書館と書店を繋げ、共同する取り組みでの活用が可能となっている。

- ・学生用端末コーナー(2階): 静寂な空間に8台の端末を設置している。L棟改修前は、図書館内の全ての学生用端末をN棟3階のコミュニケーションエリアに配置していたが、静かな環境で利用したいという需要に対応するために移設した。
- ・屋外テラス(3階): L棟3階は南側が屋上になっており、緑豊かな「かたらいの森」に面した空間を利用者が自由に出入りできるテラスとして利用している。資料の持ち出しや、携帯電話の使用が可能となっている。

また、リニューアルオープンの際には、本学卒業生である作家の海堂尊氏の講演会(コミュニケーションエリア)や学生・職員によるビブリオバトル(ラウンジ)、謎解き型の館内オリエンテーリング(全館)等のイベントを開催した。

11.1.2. 展示企画「てとり文庫」

「てとり文庫」は、学生の学習意欲・読書意欲を促すことを目的としたテーマ展示である。学習支援に役立つテーマや時事的話題から特定のテーマごとに図書を集め、N棟とK棟をつなぐ3階のスペースに3か月間展示している。

企画は、利用者としての学生と直接接することの多い閲覧担当の非常勤職員が担当し、なるべく親しみやすい内容になることを心掛けている。展示方法は、誰でも気軽に手にとることができるよう工夫し、貸出も可能としている。また、感想ノートを備え付け、学生からの意見を募り、以降の企画に反映させている。

展示記録

展示期間	企画名	貸出回数	展示冊数	貸出冊数	割合%
平成25年5～7月	あんな仕事, こんな仕事, 仕事のあれこれ	136	121	72	60
平成25年8～9月	ジェンダー 男と女	71	110	49	45
平成25年11月～26年1月	Fashion	64	86	33	38
平成26年2～5月	オリンピックとスポーツ	86	133	61	46
平成26年6～8月	本	84	171	61	36
平成26年9～11月	暮らしと人の民俗学	75	184	46	25
平成26年12月～27年2月	住まい	37	159	28	18
平成27年3～5月	新エネルギー	11	140	8	6
平成27年6～8月	境界(ボーダー)	112	186	75	40
平成27年9～11月	交通	44	135	31	23
平成27年12月～28年2月	働く	120	201	66	33
平成28年3～5月	働く～Season 2～	150	160	96	60

11.1.3. 学生選書企画の実施

平成 26 年度より、学生や若手研究者支援を目的とする千葉大学 SEEDS 基金から学生用図書を充実させるための予算措置を受けることとなった。主たる用途は、学生から図書館へ寄せられる購入希望図書費用であるが、通常のリクエストの他に生協ブックセンターと共同して学生選書企画を実施した。

選書方法は、生協ブックセンターの店舗において、学生が図書館に備え付けて欲しいと思った図書を推薦用紙とともに所定の場所に置くことで、一定期間後に図書館に配架されるというものである。実績として、平成 26 年度後期(12 月～2 月)40 冊、平成 27 年度前期(5 月～8 月)42 冊、平成 27 年度後期(11 月～2 月)57 冊、の図書が選定された。

11.1.4. 「ひまわり 8 号」配信データディスプレイの設置

気象庁の静止地球環境衛星「ひまわり 8 号」は平成 27 年 7 月から正式運用されたが、千葉大学では環境リモートセンシング研究センター(CEReS)がデータ配信機関として研究利用向けにデータの提供を行っている。貴重なデータを広く活用するため、運用開始にあわせて CEReS により附属図書館入館ゲート横に映像配信用の機器が設置された。これは、40 インチの 4K ディスプレイ 6 枚によるマルチディスプレイ(縦 180cm x 横 150cm 程度)で構成され、常時最新の地球の様子を高精彩に映し出している。

学内でも人の多く集まる図書館に設置することで、衛星からの高品質なデータを提供するとともに千葉大学の研究活動の一端を発信する役割を果たしている。

11.2. 亥鼻分館

11.2.1. 第2集密書庫の活用

亥鼻分館地下1階の第2集密書庫には、平成26年8月まで本館改修工事に伴って本館から退避した雑誌の一部を仮配置していたが、平成27年3月に経年により利用の少なくなった図書を亥鼻分館3階から移動して、書庫としての運用を開始した。利用の多寡に応じて開架書架と集密書庫を使い分けることで、効率的な資料配置にすることができた。

11.2.2. 会話可能エリアの設置

亥鼻分館には本館のアクティブ・ラーニング・スペースのような申込不要で利用できるグループ学習可能な閲覧席がなかったため、2階グループ閲覧室の一部を転用して、約50㎡の小さな会話可能エリアを設置した。平成27年12月から試行運用を開始したところ一定の利用があり、また継続を望む意見が寄せられたことから、平成28年度も継続して運用している。

11.2.3. 古医書コレクションの電子化

古医書コレクションの主体は、江戸時代から明治時代初期に出版・書写された医書で、和方、漢方、蘭方、洋方など多岐にわたる。また医学以外では、天文、和算、文学、史書等の書籍も若干含まれている。

亥鼻分館では、平成19年度より継続して千葉医学会から助成をいただき、「千葉大学附属図書館亥鼻分館所蔵 古医書コレクション」の撮影による電子化を行い、資料画像をウェブ上で公開してきた。平成27年6月には目録公開システムを更新して資料画像の提供ができるようになったことから、コレクション目録の検索と資料画像の閲覧が一連で行えるようになった。

平成25-27年度 電子化資料一覧

資料名	冊数	著者名	出版年
按腹図解	1	太田晋斎	文政10年
遠西医方名物考	12	宇田川 榛齊(玄真)	文政5年
遠西医方名物考 補遺	3	宇田川 榛齊(玄真)	文政5年
和蘭眼科新書	5	プレンキ, 杉田 立卿	文化12年
貝原養生訓	4	貝原 益軒(篤信)	文化9年
蛇病発蘊	1	糟谷 駿	天保4年
眼科錦囊	6	本庄 晋一	天保2-8年
眼科摘要	9	ボンペ	明治2年
眼目暁解	1	根来 東叔	文化14年
眼目精要(星)	1	藤井 見隆	享保11年

奇魂(尚古医典)	2	佐藤 民之助	天保 2 年
経穴彙解	8	原 南陽	嘉永 7 年
健全学	6	杉田 玄瑞 訳	慶応 4 年
皇国医系	1	万年 櫟山(純)	文久元年
産科発明	3	奥沢 軒中	天保 4 年
衆方規矩 合類	1	(記載なし)	貞享 2 年
十四経絡發揮和解(十四経和語鈔)	4	岡本 一抱子	元禄 6 年
蕉窓雑話	2	和田 東郭	文政 4 年
設里烏私図	1	セリウス	(不明)
素問玄機原病式	1	劉 完素	延宝 5 年
難経本義診解	12	岡本 為竹	宝永 3 年
撥翳鍼訣	2	鈴木 章(道順)	嘉永元年
補注 洗冤録集證	3	宋 慈	光緒 33 年
本朝食鑑	10	平野 必大	元禄 8 年
馬嶋眼科方書(馬嶋流眼科方書)	1	尾州 大一坊	永正 11 年
薬性能毒(上・下)	1	曲直瀬 玄朔	寛永 7 年
瘍科秘録	12	本間 棗軒 , 玄調	弘化 4 年
続 瘍科秘録	5	本間 玄調	安政 6 年
和蘭用薬便覧	1	日高 凉台	天保 8 年
和蘭用薬便覧 附録	2	日高 凉台(六六堂)	弘化 4 年

11.2.4. 特定非営利活動法人日本医学図書館協会への参加

(1) 資料整備

医学図書館協会による電子ジャーナルコンソーシアムに参加することにより,「ProQuest Health and Medical Complete」,「Annual Reviews 12title package」等を有利な条件で契約している。また, 会員館が所蔵する生命科学及び保健関係雑誌の欠号補充に寄与することを目的とした重複雑誌交換に毎年参加し, 他機関の資料整備にも貢献している。

重複雑誌交換実績

	提出冊数		他機関からの受領冊数		他機関への譲渡冊数	
	日本語	外国語	日本語	外国語	日本語	外国語
平成 25 年度	25	206	62	1	0	5
平成 26 年度	92	36	0	0	1	2
平成 27 年度	151	806	0	0	17	11

(2) 研修事業

平成 25 年 8 月 26 日(月)～28 日(水)に第 20 回医学図書館員基礎研修会が千葉大学附属図書館本館 I 棟を会場として開催され、職員(本館・亥鼻分館から各 1 名)が運営に参加した。

11.2.5. 学生選書企画の実施

亥鼻分館では学生希望図書の受付は随時実施しているが、千葉大学 SEEDS 基金より提供された学生用資料費を活用して学生選書企画を実施した。

(1) 選書ツアー

平成 27 年 11 月 5 日(木)に亥鼻キャンパス正門前の医学書専門書店である志学書店本店にて選書ツアーを開催した。参加者は 1 名であった(5 冊選定)。

(2) 自由選書

選書ツアーは日時が限定されるため参加できない学生が多いことが考えられたため、平成 27 年 11 月 6 日(金)～20 日(金)に志学書店本店で自由選書企画を実施した。選定した図書に推薦理由(任意)等を記入した申込用紙を挟んで店内に設置したブックトラックに置くという方法で、期間中に 6 冊が選定され重複を除いた 5 冊を購入した。

11.2.6. 1210 あかりんアワー中継の実施

本館で開催している 1210 あかりんアワーについて、火曜日の「教員が研究の楽しさを語る」に亥鼻キャンパスの教員が登壇した回を、亥鼻分館の会話可能エリアで試行として生中継した。各学部とも必修の授業が多いことに配慮して、この時間のみ飲食を可能としたところ、参加した学生は昼食をとりながら教員の話に熱心に耳を傾けていた。

- ・平成 27 年 12 月 1 日:正木治恵先生(看護学研究科)「看護学から捉える高齢者の特徴」
参加者 2 名
- ・平成 27 年 12 月 15 日:谷口俊文先生(医学部附属病院感染症内科・国際医療センター)
「臨床の現場で研究を活かすーEBM(Evidence-Based Medicine)とは」 参加者 4 名

11.3. 松戸分館

11.3.1. 「アクティブラーニングエリア」の設置

第三期中期計画に基づきアクティブ・ラーニング機能強化が求められ、平成24年8月に松戸分館1F雑誌閲覧室の一角にアクティブ・ラーニング・スペースを設置した。グループ学習を主体として一定数の利用があったが、設置形態や面積の不足によりアクティブ・ラーニング本来の目的を果たすには至らない環境であった。

これを鑑みて平成27年度にはアカデミック・リンク・センター機能の松戸分館敷衍を主眼として、多年にわたり提出してきた概算要求による改修計画と並行して、学長裁量経費によるアクティブ・ラーニング機能強化を目的とした新たな改良に踏み切ることとした。

入口にはスライドドアを設置してホールへの音漏れを防止し、従来の4人掛け平机を可動式什器(机、椅子各60)に転換、さらにホワイトボード20台を配置してフロア全体の一体化をはかった。

既存雑誌架はそのままであるが、新たに「アクティブラーニングエリア」という名称を付け、機能強化を印象づけるものとして同年11月より利用開始となった。

なお、これまで使用してきたアクティブ・ラーニング・スペースはグループ学習室としてゼミや打合せに使用されている。

11.3.2. 学生選書企画の実施

これまでも松戸分館では学生購入希望による選書を行ってきたが、平成27年度には千葉大学SEEDS基金から提供された予算により、初めて学生選書企画を実施した。松戸キャンパス内千葉大学生協園芸学部店にて平成27年11月9日より11月20日まで実施、29点が選書購入となった。

11.3.3. 1210 あかりんアワー中継の実施

本館開催による1210あかりんアワーは、身近な教員が登壇することにより人気を博しているが、アカデミック・リンク機能の敷衍と本・分館利用者間の一体化を目的として中継実現が求められてきた。

亥鼻分館とともに同時中継の試行実験が行われ、安定性など確保できたことから松戸キャンパス所属教員登壇に際し、平成28年1月に初めての中継を「アクティブラーニングエリア」において実施した。

- ・平成28年1月19日：赤坂信先生(園芸学研究科)「ランドスケープとイメージーションー「八景」という風景の把握と理解ー」参加者10名

11.3.4. 論文・レポートの書き方についての図書コーナーの設置

これまで、初めて卒論を書く学部生のために科学論文や理系論文の書き方を中心とした図書を取り揃え、さらに英語論文作成法や国際学会プレゼンテーションまで拡張して国際化対応をはかってきた。しかし、近年はバイオテクノロジー、生命科学等の特定分野を対象に編集された図書が増えてきたため、利用促進を目的として約 70 点を抜き出し、平成 27 年 6 月に「論文・レポートの書き方についての図書コーナー」として玄関ホールに仮設整備した。

主軸である論文・レポートの書き方に加え、研究生活や研究計画デザインに関する入門書やラボノートの書き方、実験レポート作成、アンケート調査の入門書、著作権や研究倫理といった資料も加え、学術研究全般に及ぶ幅広い資料が揃うこととなった。半年間で利用数が倍増し、一定の効果が認められたため、年度末までに 40 点ほど新たに追加して平成 28 年度から常設化することとした。

平成25年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）

計画 No.	中期計画	平成25年度計画	平成25年度計画確認事項	担当 組織	自己 評価	判断理由となる計画の進捗状況	最終 評価	コメント
19-2	◆ アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた科目やICTを活用した教育方法の量的・質的改善、TAの充実等を通して、学習の双方向性を確保し、主体的な学びに裏打ちされた情報発信能力を涵養する。	◆ アカデミック・リンク・センターは、アカデミック・リンクの基本3機能の定着に向けて、「授業資料ナビゲータ」に含まれるコンテンツの電子的提供、コンテンツ作成・提供に必要な権利処理・手続き・体制の確立等を進める。	① アカデミック・リンク・センターの広報活動及びセミナーの開催状況 ② 「授業資料ナビゲータ」に含まれるコンテンツの電子的提供状況 ③ コンテンツ作成・提供に必要な権利処理・手続き・体制の確立等の推進状況	アカ デミッ ク・リ ンク・ セン ター	Ⅳ	① アカデミック・リンクの理念を広報するとともに、学習支援、高等教育におけるICTの活用などをテーマとしたアカデミック・リンク・セミナーを、平成25年4月～平成26年3月に5回開催し、合計212名の参加者があった。各回の動画をウェブサイトに公開した。プレゼンテーションスペースにて開催する「1210あかりアワー」を平成25年4月～平成26年1月に62回開催し、約1,600名が参加した。 ② 「授業資料ナビゲータ」に含まれるコンテンツのうち、電子的に提供されているデータベース・Webサイト141件、電子ブック25タイトルを整備した。 ③ 平成25年7月にアカデミック・リンク・センターに電子教材の開発活用に関する共同研究部門を設置し、コンテンツ作成・提供に必要な権利処理の体制を整えた。権利処理手続きについて、著作権者と包括的協議を行うための活動を継続し、大学学習資源コンソーシアムの設立を準備した。	Ⅳ	《評価コメント》 共同研究部門を設置し、コンテンツ作成・提供に必要な権利処理の体制を構築したこと、さらに著作権者との包括的協議を継続実施し、大学学習資源コンソーシアム設立に向け取組を推進していることは高く評価できる。
23	◆ 附属図書館は、学習上必要な資料の体系的整備を行うとともに、教員と連携して授業に密着した情報提供機能を拡充、強化する。また、ICT環境を整備し、教育環境を充実させる。	◆ 附属図書館は、授業に密着した資料（デジタル資料も含む）の整備を引き続き体系的に進める。また、アカデミック・リンク・センターと連携し、学習支援を充実させる。	① 授業に密着した資料（デジタル資料を含む）の整備状況 ② アカデミック・リンク・センターとの連携による学習支援を充実した事例	附属 図書 館	Ⅲ	① 附属図書館は、平成25年度に普遍教育を中心とする69科目について授業資料ナビゲータを作成し、関連する図書412冊を新規購入して、授業に密着した資料を整備した。 ② アカデミック・リンク・センターと連携して、SA(ALSA-LS)による学習支援を継続実施するとともに、教員によるオフィスアワー@アカデミック・リンクや図書館員によるレファレンスサービスを提供し、学習支援を充実した。レファレンスサービスは平成25年度に計101件を実施した。学習支援を充実させるため、平成25年7月から開館時間を30分繰り上げ、8時30分開館の試行を開始した。	Ⅲ	

平成25年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価(抜粋)

計画 No.	中期計画	平成25年度計画	平成25年度計画確認事項	担当 組織	自己 評価	判断理由となる計画の進捗状況	最終 評価	コメント
39	◆「知の拠点」として、学会発表、論文発表、プレスリリース、ウェブサイト等による公開や、各教員の研究成果等をデータベース化し、研究者活動の実態と成果を広く社会にわかりやすく発信する体制を整備する。	◆ 各教員の研究成果をプレスリリース、ウェブサイト等により広く社会に発信し、社会還元することを推進する。また、研究者情報管理運営委員会は、研究者情報の登録促進及び研究者情報データベース(GUFA)に必要な機能追加について検討するとともに、研究者情報の利用について、Read & Researchmap(JST)等他機関との連携を含め検討を進める。	① 研究成果等を社会に発信し、社会還元した事例	附属図書館	Ⅲ	各部署において、研究成果を社会に発信するため、書籍・ニュースレターの発行やウェブサイトへの論文掲載、公開講座・セミナーの開催、プレスリリースなどが積極的に実施されており、研究成果が十分に社会還元された。	Ⅲ	《指摘事項》 研究成果等の外部発信について、英語版の必要性が考えられる。国際化に対応した計画が必要ではないか。
77	◆ 教育研究等に関する基本情報や教育・研究データベースを活用した学術成果の情報等大学の有意な教育研究活動の成果を広く公開する。また、自己点検・評価や第三者評価の結果等の法人運営に関する基本情報について、適切に公開する。	◆ 学外向けウェブサイト等により、教育研究情報が社会により効果的に伝わるよう改善・充実を図るとともに、学術研究成果の一部を「研究成果の見える化」と題し、冊子及びウェブサイトにより学内外に発信する。また、英語版ウェブサイトについて、内容の充実を図る。附属図書館は、学内関係部局と連携を進め、紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開を促進する。	④ 紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開の促進状況	附属図書館	Ⅲ	千葉大学学術成果リポジトリ(CURATOR)については、平成25年度に新たに539件を登録し、総数で89,157件の研究成果を公開した。紀要等の学内刊行物については、現在刊行中の11誌すべてを登録済みである。博士学位論文については、62件(平成25年9月学位授与分の全件)の全文または要約を新規登録し、累計796件となった。学位論文のインターネットによる公開を行うため、学務部教務課と連携して、説明資料を作成した。平成25年度のリポジトリのダウンロード件数は、1,647,917件であった。	Ⅲ	

平成26年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価(抜粋)

計画 No.	中期計画	平成26年度計画	平成26年度計画確認事項	担当 組織	自己 評価	判断理由となる計画の進捗状況	最終 評価	コメント
19-2	◆ アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた科目やICTを活用した教育方法の量的・質的改善、TAの充実等を通して、学習の双方向性を確保し、主体的な学びに裏打ちされた情報発信能力を涵養する。	◆ アカデミック・リンク・センターは、アカデミック・リンクの基本3機能の定着に向けて、引き続き、コンテンツの電子的提供、コンテンツ作成・提供に必要な権利処理に、それらの評価を行う。	① コンテンツの電子的提供状況 ② コンテンツ作成・提供に必要な権利処理手続き・体制の確立等の進捗状況 ③ 「①、②」の評価の実施状況	アカ デミッ ク・リ ンク・ セン ター	IV	① 「授業資料ナビゲータ」に含まれるコンテンツのうち、電子的に提供されているデータベース・webサイト161件、電子ブック29タイトルの整備状況。また授業紹介動画42点、アカデミック・リンク・セミナー全会の動画を作成しYouTube上で公開するほか、授業動画2科目を作成し、Moodle上で公開するため提供した。 ② 教材制作のための権利処理手続きを効率的に進めるために、大学学習資源コンソーシアムを平成26年5月に設立し(事務局は千葉大)、著作権者と包括的協議を開始した。コンソーシアムには全国から18大学(平成27年3月1日現在)が参加した。 ③ アカデミック・リンク・センター評価委員会を開催(平成27年1月23日)し、外部評価委員による評価を実施した。その評価をもとに評価報告書と資料集を発行した。	IV	《評価コメント》 教材制作のための権利処理手続きを効率的に進めるために、大学学習資源コンソーシアムを設立し、著作権者と包括的協議を開始したことは評価に値する。
23	◆ 附属図書館は、学習上必要な資料の体系的整備を行うとともに、教員と連携して授業に密着した情報提供機能を拡充、強化する。また、ICT環境を整備し、教育環境を充実させる。	◆ 附属図書館は、授業に密着した資料(デジタル資料を含む)の整備を進める。また、アカデミック・リンク・センターと連携し、学習支援を充実させる。	① 授業に密着した資料(デジタル資料を含む)の整備状況 ② アカデミック・リンク・センターとの連携による学習支援を充実した事例	附属 図書 館	III	附属図書館は、平成26年4月～平成27年1月に普遍教育を中心とする93科目について授業資料ナビゲータを作成し、関連する図書564冊を新規購入して、授業に密着した資料を整備した。さらに、アカデミック・リンク・センターと連携して、SA(ALSA-LS)による学習支援を継続実施するとともに、教員によるオフイスアワー@アカデミック・リンクや図書館員によるレファレンスサービスは平成26年4月～平成27年1月に計68件(クイックレファレンスを除く)を実施した。	III	

平成26年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価(抜粋)

計画 No.	中期計画	平成26年度計画	平成26年度計画確認事項	担当 組織	自己 評価	判断理由となる計画の進捗状況	最終 評価	コメント
39	◆「知の拠点」として、学会発表、論文発表、プレスリリース、ウェブサイト等による公開や、各教員の研究成果等をデータベース化し、研究活動の実態と成果を広く社会にわかりやすく発信する体制を整備する。	◆ 各教員の研究成果等をプレスリリースやウェブサイトにより広く社会に発信し、社会還元することを推進する。また、研究者情報データベース(CUFA)と各種情報データベースとの連携を進める。	① 研究成果等を社会に発信し、社会還元した事例	附属図書館	Ⅲ	各部署において、研究成果を社会に発信するため、書籍・ニュースレターの発行やウェブサイトに掲載、論文掲載、公開講座・セミナーの開催、プレスリリースなどが積極的に実施されており、研究成果が十分に社会還元された。	Ⅲ	
77	◆ 教育研究等に関する基本情報や教育・研究データベースを活用した学術成果の情報等大学の有意な教育研究活動の成果を広く公開する。また、自己点検・評価や第三者評価の結果等の法人運営に関する基本情報について、適切に公開する。	◆ 学外向けウェブサイト等により、教育研究情報が社会により効果的に伝わるよう改善・充実を図るとともに、学術研究成果の一部を「研究成果の見える化」と題し、冊子及びウェブサイトにより引き続き学内外に発信する。また、自己点検・評価や第三者評価の結果等の法人運営に関する基本情報の公開について、充実を図る。さらに、英語版ウェブサイトについて、内容の充実を図る。附属図書館は、学内関係部署と連携を進め、紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開を促進する。	⑤ 紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開の促進状況	附属図書館	Ⅲ	千葉大学学術成果リポジトリ(CURATOR)については、平成26年4月～平成27年1月に新たに574件を登録し、総数で89,667件の研究成果を公開した。紀要等の学内刊行物については、現在刊行中の11誌すべてを登録済みである。学位論文は、平成26年4月～平成27年1月に161件を新規登録し、総数で958件を登録した。平成26年4月～平成27年1月のリポジトリのダウンロード件数は、1,206,098件であった。	Ⅲ	

第2期中期計画（平成22～27年度）									
計画 No.	中期計画	担当 組織	自己 評価	判断理由となる中期計画の実施状況	平成27年度計画		自己 評価	判断理由となる年度計画の進捗状況	最終 評価
					平成27年度計画	平成27年度計画確認事項			
◆	アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた科目やICTを活用した教育方法の量的・質的改善、TAの充実等を通して、学習の双方向性を確保し、主体的な学びに裏打ちされた情報発信能力を涵養する。	アカ デミッ ク・リ ンク・ セン ター	IV	平成23年4月に、課題探究能力を備えた「考える学生」を創造することを目的としてアカデミック・リンク・センターを設置し、①空間整備（アクティブラーニングに適した空間設計にもとづく附属図書館の増築など）、②コンテンツ整備（アクティブラーニングに資する授業紹介動画コンテンツの制作、電子教材の作成・利活用・流通に関する手法開発及びそのための課題解決に向けた大学間コンソーシアムの設立など）、③人的学習支援（学生のニーズに即した、大学院生による双方向ラーニングサポート体制の創出など）等の活動を展開し、年5回程度開催のアカデミック・リンクセミナー等を通じ活動成果の全国への普及を図った。 諸実績については次の通り。 ・ 附属図書館増改築 全15,808㎡（アクティブ・ラーニングスペース（556席）、プレゼンテーションスペース（75人収容）、ラウンジ（68席）、静読閲覧室（115席）、学生用PC75台などを含む） ・ 授業紹介動画 36科目（平成27年度） ・ 1210あかりんアワー 245回（通算） ・ ラーニングマネジメントシステム（Moodle）対応科目 1217科目（平成27年度） ・ 大学院生ラーニングサポートによる学習相談対応 434回（平成27年度） ・ 大学学習資源コンソーシアム 平成26年創設、平成28年3月現在19大学が参加 ・ 学生による学習・研究発表、文化的活動成果の展示会等の開催支援 9回（平成27年度）	◆ アカデミック・リンク・センターはアカデミック・リンクの基本3機能の定着に向けて、コンテンツの電子的提供、コンテンツ作成・提供に必要な権利処理手続き等を進めるとともに、評価結果に基づき、新たな活動を計画し、実行する。	① コンテンツの電子的提供状況 ② コンテンツ作成・提供に必要な権利処理手続きの進捗状況 ③ 評価結果に基づいた新たな活動の計画・実行状況	IV	① 平成27年4月～平成28年2月に「授業資料ナビゲータ」に含まれるコンテンツのうち、電子ブック29タイトルを整備し、データベース・Webサイト94件を収録した。授業などの収録70件を行い、また授業紹介動画36件を作成しYouTube上で公開するほか、反転授業用動画の2件を作成し、Moodle上での公開用に提供した。また、1210あかりんアワーの玄鼻・松戸両キャンパスへの配信を行った。 ② 教材制作のための権利処理手続きを効率的にすすめるために設置した大学学習資源コンソーシアム（CLR）では学術著作権協会と協議の上、著作物の教材への利用実態調査を開始し、CLR加盟大学は、調査期間における学術著作権協会管理著作物の教材への利用許諾を得た。なお、CLRには新たに1大学が参加し、計19大学となった。 ③ 新たに技術職員1名を配置してMoodle支援体制、コンテンツ制作室の機能を強化した。授業期間中のPCサポートデスクを設置し、117件のサポートを行った。学内教員に対して電子教材作成についてのアンケートを実施し、回答43件の中からヒアリング17件を行い、教材3件を作成した。	IV

第2期中期計画（平成22～27年度）								
計画 No.	中期計画	担当 組織	自己 評価	判断理由となる中期計画の実施状況	平成27年度計画	最終 評価		
					平成27年度計画		平成27年度計画確認事項 自己 評価	判断理由となる年度計画の進捗状況
23	◆ 附属図書館は、学習上必要な資料の体系的整備を行うとともに、教員と連携して授業に密着した情報提供機能を拡充、強化する。また、ICT環境を整備し、教育環境を充実させる。	附属 図書 館	IV	・ 附属図書館において、多角的な手法により、シラバス掲載図書や学生希望図書等学習上必要な資料の体系的な整備（図書68,478冊、電子図書17,012タイトル（平成28年3月25日時点））を行い、累計の蔵書冊数は図書1,387,417冊、電子図書23,022タイトルとなった。また、教員と連携して授業科目毎のバスファインダー「授業資料ナビゲータ」（当該科目の参考資料リスト）を作成（のべ427科目）し、授業に密着した情報提供を行った。平成24年度以降はその作成プロセスを電子化し、紙形式のほかにインターネットを通じて利用も可能とした。加えて、電子的資料を自宅や外出先からも遠隔利用できるシステム（シボレス認証）を整備し利便性を高めた。	◆ 附属図書館は、学習上必要な資料が体系的に整備されているかを評価するとともに、授業に密着した資料（デジタル資料を含む）の整備を進める。また、アカデミック・リンク・センターと連携し、学習支援を充実させる。 ① 学習上必要な資料が体系的に整備されているかの評価状況 ② 授業に密着した資料（デジタル資料を含む）の整備状況 ③ アカデミック・リンク・センターとの連携により学習支援を充実した事例	IV	・ 附属図書館において、普通教育を中心とする55科目について授業資料ナビゲータを作成し、その中で紹介した、授業に密着に関連する1,495冊の図書等資料を所定コーナーに配置（うち152冊は新規購入）した。さらに、アカデミック・リンク・センターと連携して、SA(ALSA・LS)による学習支援を継続的に実施するとともに、教員によるオフィスアワー@アカデミック・リンクや図書館員によるレファレンスサービスを継続して実施し、学習支援を充実した。加えて、横浜国立大学、お茶の水女子大学との連携により、閲覧回数に基づいて電子ブックを購入するという新しい図書購入方式（PDA）を国内で初めて導入し、学習上の需要に即した166冊（平成28年2月末時点）の電子ブックを整備した。	IV
39	◆ 「知の拠点」として、学会発表、論文発表、プレスリリース、ウェブサイト等による公開や、各教員の研究成果等をデータベース化し、研究活動の実態と成果を広く社会にわかりやすく発信する体制を整備する。	附属 図書 館	Ⅲ	・ 各部署において、研究成果を社会に発信するため、書籍・ニュースレターの発行やウェブサイトへの論文掲載、公開講座・セミナーの開催、プレスリリースなどが積極的に実施されており、研究成果を十分に社会還元した。 ・ 平成28年3月に本学に在籍する教員によって得られた学術研究成果に対する学内外からの自由な閲覧を保証することにより、学術研究のさらなる発展に寄与するとともに、情報公開の促進と社会に対する説明責任を果たすため、オープンアクセスに関する方針を定めた。	◆ 研究者情報と各種情報データベースとの連携を継続的に進めるとともに、データベースの拡充及び利用環境の整備・検討を進める。 また、各教員の研究成果等をプレスリリースやウェブサイトにより公開するなど、広く社会に発信し、社会還元することを推進する。	Ⅲ	・ 各部署において、研究成果を社会に発信するため、書籍・ニュースレターの発行やウェブサイトへの論文掲載、公開講座・セミナーの開催、プレスリリースなどが積極的に実施されており、研究成果を十分に社会還元した。 ・ 平成28年3月に本学に在籍する教員によって得られた学術研究成果に対する学内外からの自由な閲覧を保証することにより、学術研究のさらなる発展に寄与するとともに、情報公開の促進と社会に対する説明責任を果たすため、オープンアクセスに関する方針を定めた。	Ⅲ

平成27年度計画及び第2期中期目標期間の実施状況に基づく自己点検・評価（抜粋）

第2期中期計画（平成22～27年度）										
計画 No.	中期計画	担当 組織	自己 評価	判断理由となる中期計画の実施状況	平成27年度計画		最終 評価			
					平成27年度計画	自己 評価				
77	◆ 教育研究等に関する基本情報や教育・研究データベースを活用した学術成果の情報等大学の有意な教育研究活動の成果を広く公開する。また、自己点検・評価や第三者評価の結果等の法人運営に関する基本情報について、適切に公開する。	附属 図書 館	IV	・ 千葉大学学術成果リポジトリ（CURATOR）により、学術論文9,300件、紀要論文2,737件、博士学位論文806件、科学データ46,305件をはじめ、合計61,758件の学術成果を新たに公開し、累計の公開件数は90,243件となった。期間中のダウンロード件数は6,310,712件に上った（平成28年2月末時点）。加えて、平成28年3月に本学の学術成果公開に係る基本方針である「千葉大学オープンアクセス方針」を策定した。	◆ 教育研究情報が社会により効果的に伝わるようウェブサイト等の改善・充実を図る。 また、自己点検・評価や第三者評価の結果等の法人運営に関する基本情報の公開について、工夫する。さらに、英語版ウェブサイトについて、内容の充実を図る。 附属図書館は、学内関係部局と連携を進め、紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開を促進する。	④ 紀要等の学内刊行物に掲載された学術成果や学位論文の電子的な公開の促進状況	IV	・ 平成28年3月に学術成果公開に係る基本方針として国内としても先駆的事例となる、「千葉大学オープンアクセス方針」を策定した。千葉大学学術成果リポジトリ（CURATOR）については、平成27年4月～平成28年2月に新たに610件を登録し、総数で90,243件の研究成果を公開した。紀要等の学内刊行物については、現在刊行中の11誌すべてを登録済みであり、学位論文は、平成27年4月～平成27年9月に37件を新規登録し、総数で1,140件を登録した。	IV	最終 評価 IV

中期計画推進担当組織による平成27年度の及び第2期中期目標期間の実施状況の自己評価 ※計画によっては中期計画推進担当組織が複数あり

中期目標対応部会による平成27年度及び第2期中期目標期間の実施状況の最終評価と判断理由
※評価がⅣの計画については、最終評価欄のセルに色（桃色）を付けています。

101

＜点検・評価のスケジュールと自己点検・評価の方法＞

① 大学全体の実施状況の確認（2月9日～3月3日）

- ⇒ 中期計画推進担当組織及び実施担当部局等に平成27年度計画の実施状況を確認〔平成27年度計画実績報告書基礎資料を作成〕
- ⇒ 業務方法書第10条第2項に基づく業務の手順の確認について、年度計画の実施状況の依頼の際に併せて行い、全ての部局等において、業務執行について必要とされる業務の手順を踏まえたものとなっている。

② 中期計画推進担当組織による自己評価（3月14日～3月31日）

- ⇒ ①により収集、作成した「実績報告書基礎資料」を参考に、中期計画推進担当組織がそれぞれの担当する計画について、全学的にみた実施状況等を把握・分析し、4段階判定により総合的に自己評価を実施。また、自己評価の「判断理由となる計画の実施状況」を記載。

【自己評価（4段階判定）】

- Ⅳ：「年度（中期）計画を上回って実施している」
- Ⅲ：「年度（中期）計画を十分に実施している」
- Ⅱ：「年度（中期）計画を十分には実施していない」
- Ⅰ：「年度（中期）計画を実施していない」

③ 中期目標対応部会による最終評価（4月12日～4月21日）

- ⇒ ①により収集した大学全体の実施状況及び②の中期計画推進担当組織による自己評価を基に、＜評価の視点＞を踏まえ、4段階判定により点検・評価を実施。

【最終評価（4段階判定）】

- Ⅳ：「年度（中期）計画を上回って実施している」
- Ⅲ：「年度（中期）計画を十分に実施している」
- Ⅱ：「年度（中期）計画を十分には実施していない」
- Ⅰ：「年度（中期）計画を実施していない」

＜評価の視点＞

- ◆ 第三者的な視点で点検・評価を実施（学外者が評価した場合を想定して客観的に実施）
- ◆ 年度計画（中期計画）に記載の取組が実施されているか？
- ◆ 実施状況から判断して年度計画（中期計画）が達成されたか？
- ◆ 「実績報告書基礎資料」に記載されている全学の状況及び自己評価の判断理由等から勘案して、中期計画推進担当組織が行った自己評価は妥当なものか？

④ 自己点検・評価書完成（5月）

- ※ 「平成27年度計画実績報告書基礎資料」については、企画政策課ウェブサイトに掲載